

# 1997.7.28

## 絵本学会 NEWS No.1

発行：絵本学会

発行日：1997年7月28日

編集：絵本学会事務局・広報委員会

事務局：〒187 東京都小平市小川町1-736

武蔵野美術大学視覚伝達デザイン研究室内

TEL : 0423-42-6091 FAX : 0423-42-5173

<http://vcd.musabi.ac.jp/~ehongaku/homepage.html>



絵本学会設立総会報告  
絵本学会設立記念講演・シンポジウム  
基調講演  
シンポジウム「絵本とは」  
専門委員会の発足  
インフォメーション  
事務局からのお知らせ

## 絵本学会

### 絵本学会設立総会報告

絵本学会設立総会は、1997年5月11日、武蔵野美術大学（東京都小平市）で開催されました。設立の趣旨、経緯が吉田新一設立運営委員会代表より報告された後、会則案の審議、役員の選出が行われ原案どうり承認されました。

初代会長に選任された、吉田新一会長により、絵本学会の設立が宣言され、正式に絵本学会が発足いたしました。

以下に総会次第と承認された会則、選出役員をお知らせいたします。

設立総会前日までの入会申込者：247名 賛助会員：9件

設立総会の出席者数：159名

#### 1. 開会の辞

#### 2. 絵本学会設立の趣旨、経緯について

吉田新一設立運営委員会代表より、絵本学会設立の趣旨、経緯について説明がなされた。

#### 3. 絵本学会会則について

設立運営委員会事務局より、以下の通り会則案を一部修正する旨の説明があり、原案通り承認された。

#### 第4条（会員）

2. 準会員は、大学、短期大学に在学中の学生とする。

→準会員は、大学、短期大学、専門学校などに在学中の学生とする。

に修正

#### 第6条（総会）

3. 総会の定足数は出席者と委任状を含め全会員の3分の1以上とする。を削除

#### 第9条（専門委員会）

5. 各委員会および委員長は、理事会の議を経て会長が委嘱する。

→各委員会および委員長は、理事会の議を経て会長が委嘱する。に修正

#### 第10条（役員）

5. 顧問 若干名 本会の運営に関与しその目的の実現を援助する。

顧問は会長が委嘱する。

→顧問 若干名 本会の運営に関与しその目的の実現を援助する。顧問は理事会の議を経て会長が委嘱する。に修正付則

2. 発足時の理事、顧問、監事は、設立運営委員会が推薦し設立総会の承認を得て決定する。この付則は役員が選出された時点で廃止、削除される。を追加

引き続き、理事選出規則（案）、監事選出規則（案）、運営委員選出規則（案）が示され、これを暫定規則とし、平成11年までに整備し、制定することが了承された。

#### ●理事選出規則

1. 理事は、7名の内5名は正会員の中から運営委員の選挙によって選出される。会長は選出された理事の推薦を得て、さらに2名以内の理事を任命することができる。

2. 選出された理事は、総会の承認を得て決定する。

#### ●監事選出規則

1. 監事は、正会員の中から正会員の選挙によって選出される。  
2. 監事候補は、改選の1ヶ月以上前までに自薦、推薦によって事務局に届ける。

3. 選挙は、2名を連記し郵送によって行う。

4. 選挙によって選出された監事は、総会の承認を得て決定する。

#### ●運営委員選出規則

1. 運営委員は、14名の内10名は正会員の中から正会員の選挙によって選出される。会長は選出された理事の推薦を得て、さらに4名以内の運営委員を任命することができる。

2. 運営委員候補は、改選の1ヶ月以上前までに自薦、推薦によって事務局に届ける。

3. 選挙は、10名を連記し郵送によって行う。

4. 選挙によって選出された運営委員は、総会の承認を得て決定する。

## 絵本学会設立記念講演・シンポジウム



### 基調講演 吉田新一 絵本学会会長

今なぜ絵本にこだわるのでしょうか？絵本学と特に名づけて何を意図しているのでしょうか？そしてまた、絵本学会を作る意味はなんでしょうか？そのことをごいっしょにしばらく考えてみたいと思います。

絵本とは？これは、ここに集まられた方たちにまず問い合わせられる質問であります。たぶんお一人お一人の考えておられる絵本とは？の答えは微妙に違っているかもしれません。まずそれらをだしあうことから、絵本学会という行動あるいは運動をはじめてみてはどうでしょう。

まず話のまくらとして、ここに一冊の絵本の研究書があります。1970年代までのアメリカ絵本の実状を包括的・具体的に論じた『アメリカン・ピクチャ・ブックス』という本です。その本の著者バーバラ・ベーダーは冒頭で、絵本をこう定義しています。

「ピクチャーブック（絵本）は、テキストとイラストレーションがトータルにデザインされたものであり、マニュファクチュアの産物、すなはち、生産品であり、コマーシャル・プロダクト、すなはち、商品であり、また、社会的、文化的、歴史的ドキュメント（記録）であるが、なによりも第一に、子どもにとって一つの経験となるものである。芸術の形態としては、絵本は、絵とことばの相互依存、向かい合う二つのページの同時提示、ページめくりのドラマをかなめとしている。そして、絵本は、それ自体として、無限の可能性をもつ」と、絵本を定義しています。

ベーダーの、絵本とは？の問い合わせに対する答えは簡潔で、なかなか示唆に富んだ内容を含んでいると思います。

まずピクチャー・ブックがテキストとイラストレーションのトータル・デザインであるという点は、ヴァージニア・リー・バートンの絵本作品を例に出すまでもなく、絵本がテキストとイラストレーションの内容的・形態的な有機的統合体であるということは、今日ではもう誰もが第一に挙げる絵本の性格づけでしょうから、この点はみなさんも異論の余地はないでしょう。

では、次にベーダーが挙げている点、絵本は「アイテム・オブ・マニュファクチュア」であるということはどうでしょう。アイテムとは品物。マニュファクチュアの品物だと、絵本について特に言つているのです。マニュファクチュアとは？英語の辞書で見ますと「手や機械によって、素材ないし原料から、大量に物品を生産すること」とあります。分業による手工的・機械的作業を経て生産される品物だと、言つているのです。

そもそも活版印刷術の発明でヨーロッパの近代ははじめました。情報の大衆化です。そして、各種の技術革新によって、出版文化・出版美術は目覚しい発展をとげてきました。そこで、絵本も、どういう素材を使って、どういう工程を踏んで出来上がるのか、アイデア作り、下絵作りから、印刷、装丁、製本という工程のそれぞれが、絵本学の研究対象になりますよ、ということが、ベーダーの定義から読み取れます。もう少し奥を読めば、下絵作りに至るまでには、絵本作りの大切な表現の問題がありますし、また、装丁には特にデザインの問題など、その他踏み込めば絵本に関する大切な研究課題がたくさん含まれていると思いますが、ベーダーはここでは物の作

※これらの規則は、次期役員改選までに検討、整備し、平成11年総会で決定し、制定したい。

#### 4. 絵本学会役員の選出

理事、顧問、監事、運営委員候補者が設立運営委員会より推薦され、以下の役員が承認、選出された。

##### 新役員

- ・理事・会長 吉田新一（日本女子大学）
- ・理事・事務局長 今井良朗（武蔵野美術大学）
- ・理事 太田大八（作家）
- ・理事 島 多代（国際児童図書評議会）
- ・理事 中川素子（文教大学）
- ・理事 松居 直（福音館書店）
- ・理事 松本 猛（ちひろ美術館）
  
- ・監事 笹本 純（筑波大学）
- ・監事 松岡希代子（板橋区立美術館）
  
- ・顧問 久保義三（武蔵野美術大学）
- ・顧問 三木 卓（作家）
  
- ・運営委員 石井光恵（日本女子大学）  
伊藤元雄（ブックグローブ社）  
今井良朗（武蔵野美術大学）  
太田大八（作家）  
駒形克己（グラフィックデザイナー）  
申 明浩（東京大学）  
高田知美（武蔵野美術大学）  
中川素子（文教大学）  
増成隆士（筑波大学）  
松本 猛（ちひろ美術館）  
吉田新一（日本女子大学）

#### 6. 設立宣言

初代会長に選任された、吉田新一會長により、絵本学会の設立を宣言。

#### 7. 閉会の辞

られ方に焦点をあてて言っているのでしょうか。

次の指摘は、絵本は商品「コマーシャル・プロダクト」であるということです。そもそも出版文化の発達は商業活動の発展があったからでした。本は出版社の手を経て市場にでまわります。利益のあがらないものは商業ルートには乗らないのです。もちろん出版社は文化発展の大切な一翼をになっていますから、利益の追求だけを目的にしてはいないでしょう。が、今日私たちがもっとも危機感をいだいている現実の一つは、絵本が商品であることに起因しているのです。少子化、不況経済、本離れ、そういう現象の中で、児童書の出版は一昔前とくらべて冷え切っています。将来性のある絵本作家の卵はきわめて育ちにくい状況にあると言わなければなりません。すぐ売れるきわものが優先されて質の評価は二の次にされがちです。また、この商品には、流通というネックもあります。よいと評価されている絵本が絶版の憂き目をなめさせられているではありませんか。いい絵本を作つてさえいれば状況は好転していくという思い込みは、もはや幻想にすぎなくなりました。いい絵本を作つたら、それをどう社会に出していくかも真剣に考えなければならない物なのですよ、ということをベーダーははっきり言ったのだ、と読むことができます。コマーシャル・プロダクトであるから、そのことも絵本学の課題のひとつですよ、そう言われているように現在は思えます。

ベーダーは次に、絵本が社会的、文化的、歴史的ドキュメントである、と言っています。このことは今日では既に自明のことでしょう。現に絵本に注目して、それを研究のプロセスに活用しておられる方は年々増えつつあります。絵本はドキュメントなのです。過去の時代に生きた人々の生活のようすや考え方をイラストレーションや絵本から探ろうとする歴史学者・社会史学者、特定の絵本を使って、読者である子どもの反応を国際比較して民族文化の持性をさぐったり、また、子どもの年齢差による反応の相違から子どもの発達について研究する心理学者、高齢者の心のケアに絵本を活用して臨床研究をする人、絵本やイラストレーションを使って都市と住宅の問題を考察する建築学者、立ち上がる本、動く本に注目して3Dブックスの世界を追求する建築史学者等々、従来おこなわれてきた児童文学、保育学、図書館学以外の分野の研究者たちが、絵本を積極的に使っておられます。それら立場の違う研究者たちが絵本を共通項にそれぞれが得られた知見を互いに交換共有し合い、さらには共同研究の道なども開かれる場になることを期待して、絵本学会は誕生しました。

さて、ベーダーは順序としては5つ目、しかし、なによりも第一にと言って、絵本は「子どもにとって、一つの経験となるものである」と述べています。その英文は「アン・エクスピアリアンス・フォア・ア・チャイルド」です。子どもがチルドレンと複数形ではなく、ア・チャイルドと単数形で書かれていることは、なかなか意味深長であると私は思います。子どもに限りませんが、とりわけ子どもは、受動的でなく積極的に、自分から進んでアクティヴに活動する、これが人間発達にたいへん重要なのですね。経験は蓄積されますから、経験を重ねることが発達をうながすことになります。にもかかわらず今日、子どもたちの置かれている状況を見ると、テレビに代表されるように、ただその前に座って、一方的に向こうからくるものを受け取るだけ、完全な受け身で、これは経験ではありません。経験はアクティヴな行動の結果得られるものです。教室の授業も、個別には先生方の工夫でよい試みが展開されていることを承知している

つもりですが、総体としては受験態勢の中で、与えられたものの機械的まる暗記という受け身の、非生産的な、姿勢が依然として一般化しています。もちろん情報の圧倒的な一方的流れに対して、流されないで対抗できる能力を養うメディア・リテラシーの開発にも、真剣に私たちは取り組まなければなりませんが、現実はまだ野放し状態に子どもは放置されています。そこで、幼い子どもに対して今、とりわけ絵本というものを考えなおそうじやないか、という絵本復権の声があがってくるのも当然のことでしょう。

子どもが絵本と向き合う時は、テレビの前に座っているときとはぜんぜん違うということは、ここにお集まりの方たちには敢えて申し上げるまでもありません。子どもは絵本とは一対一の関係で出会うのです。絵本には読み手と向き合うまなざしがあります。読み手は絵本のまなざしに応えることによって、人間関係を体験することができます。それをベーダーは「一人一人の子どもに出会いの経験を与えてくれるもの」というふうに表現しているのだと思います。少し気障っぽい言い方をすると、絵本とは子どもにとって「一期一会」の経験をさせるもの、と言っているのではないでしょうか。いうまでもなく、ここにいう体験とは個別個人的な経験のことですか



ら、ベーダーはひとりひとりの個別の経験になるもの、そういう意味で、アン・エクスピアリアンス・フォア・ア・チャイルドと言っているのでしょう。

絵本と子どもの関係がそのようなものであるならば、その機会を積極的に生み出すにはどういう方法があるのか。そこで絵本の与え方という研究テーマが浮かび上がってきますが、このテーマはたぶん絵本研究の中ではある意味でもっとも経験的蓄積があるといえましょう。しかし、そこでも、では、よい絵本とは?という評価の問題になると、また意見の相違がかなり出てくるはずです。これも絵本学会がダイアローグの場を提供したいのです。

ベーダーの定義を最後まで一応たどっていきますと、この後、「絵本は芸術の形態としては、絵とことばの相互依存、向き合う二つのページの同時提示、ページめくりのドラマをかなめとしている」と言っています。この中では、向き合う二つのページの同時提示ということを絵本の基本的特徴の一つに挙げている点が注目していい指摘だと思います。ワンダ・ガーグの『100まんびきのねこ』が絵本の見開きのページをはじめてドラマティックに使ったことや、現代ではモーリス・センダックが向かい合う二つのページをいかに有効に使っているかなど考え合わせますと、改めてベーダーの指摘はきわめて興味深い指摘だと思います。ついでに申し上げてみると、セン



ダックは近作『わたしたちもジャックもガイもみんなホームレス』で、はじめて全ページ見開き一面の絵という絵本を作りました。彼のこれまでの他の作品と比べて、そのことの意味はきわめて大きいのではないか、と私は思っていますが、いかがでしょう。

さて、ベーダーの芸術の形態、すなはちアート・フォームとしては、というこの部分を、ベーダーの指摘からちょっとはなれて、すこし別な角度から考えてみたいと思います。今日の目から見ると、絵本は現代生活におけるたいせつなコミュニケーション・アートである、という言い方ができます。最近はすべてがボーダーレス現象を起こしていて、男女という性差などもなくなりつつありますが、大人と子どもの世界をへだてていた境界線もあいまいになってきました。もはやシークレット・ガーデンは存在しなくなりつつあります。そういう状況の中で、絵本も子どもだけの占有物ではなくなりつつあります。いえ、メディア・コミュニケーションの優勢な現代ではアート・フォームとしての絵本というものは、もっと広く、積極的に社会に生かされるべきである、と考える人がひじょうに多くなってきて、それらの声が集まって、実はこのように絵本学会が誕生したというふうに、私は理解認識しています。

そこで、ここで改めて、本日みなさま方のお手元に届いている絵本学会設立趣意書の文章を読ませていただきたいと思います。これは設立準備委員会で十分に練られた文章です。

「今日、絵本表現の場は想像以上に広がっています。考え方や対象の定め方も様々なら、表現性も実に多様です。多様な表現の世界を持つこれらの絵本を、単純な概念で分類することには無理があります。しかし、絵本の形式がそれほど単純でないことが十分承知されながら、一般的には、教育的意味や文学的意味をもって語られることが多いのが実状です。

絵本は、様々な要素を総合することで成り立っています。内容を表す絵と文、絵と文の表現方法や構成、複製するための印刷、用紙、装丁等々。これらがバランスよく組みあわされて絵本の芸術性やメディアとしての価値を生み出しています。絵本は、デザインとしての造形手法を内在し、視覚言語や視覚コミュニケーションの本質に触れる表現性も持っています。絵本は、一面的な絵画的評価や文学的評価だけにとどまらず、メディアや芸術表現といった分野を含め、もっと多角的な表現の視座からもとらえる必要があります。絵本の評価は、もっと幅広い表現の分野に置かれるべきでしょう。

絵本を固定した一つの表現形式とみなすだけでなく、表現の位相を把握し解明していくための研究が、新しい視野を拓くものと期待されるのです。それは、絵本学とも呼ぶべきものであり、絵本というメディアを介して研究される新たな学問領域だといえるでしょう。

そのためには、従来の絵本領域の枠組みを越えた、造形学、美学、美術史、哲学、記号学、論理学、教育学、言語学、心理学、文化人類学などの諸科学、また、デザイン、絵画、映画、演劇、文学、漫画その他様々な分野の専門家相互の協力による情報交換、共同研究が望まれます。」

ところで、そもそも絵本学会の話が始まった発端、学会設立の眞のダイナモは太田大八氏で、氏の絵本に寄せる熱い熱い思いが今日の日に至りました。話は今から7年前の1990年4月、「ピーブー」という雑誌が発刊されたとき、太田大八氏は「発刊のことば」を書いて、そこに氏の思いが鮮明に表されました。今その一部を太田氏のお許しをいただきて読ませていただきたいと思います。

太田氏は書いておられます。「日本には、毎月おびただしい量の絵本が出版されています。また、ここ20年来、絵本作家や絵本のイラストレーターを志向する人の数も増加しています。しかし、それらの現象はかならずしも絵本の質の向上につながるものではなく、絵本の販売競争は、逆に、迎合、追従、媚態、といった後退の傾向を数多く見せています。

日本では、じつに多種、多様の絵本が氾濫し、同様の定価でも、その質の差は、低俗、卑俗なものから、国立美術館に収蔵してもよいほどのハイレベルのものまで混交のまま、購買者の選択にまかされています。

本を選ぶための参考としては、学校図書館関係の方々が選定するものや、新聞などの絵本評論もありますが、イラストレーションそのものに対する評論は、皆無の状態であります。

一般的には「たかが絵本」といった認識で見過されており、絵本が人格形成期の子どもに大きな影響を持つ大切なメディアであると考える人は、極めて少数派であると言わなければなりません。これは、文化を考える上で指摘されるべき大きな問題点であると思います。

日本は、・・・成長した経済力で、あたかも文化が高揚したかの如く錯覚しているのではないでしょうか。豊富な物量の中で、精神の空洞化を感じている人も多いでしょう。経済優先、利潤追求を急ぐあまり、子どもたちの心の問題に対する関心がどこまで考えられているのか・・・。

だから、いま絵本なんです。

絵本は人間が生れて最初に出会う心の栄養剤です。

絵本は時に奥深く、また果てしない広がりをもって機能します。安定、平和を願うなら、ミサイルや戦闘機より、一冊の優れた絵本こそ効果的ではないでしょうか。

よい絵本を創り、やさしさ、空想、ユーモア、知識――を世界中に広げ、相互理解を増すことが大切です。

絵本にこだわる人は、みんな同じ気持ちをもっているでしょう。だからみんなで、いま絵本について語り合い、勉強するために、今まで語り合ってきた友人たち（と言って、この雑誌ピーブーが計画されたのだ、とそこでは書いておられます）、作家、画家、出版、図書館関係、文庫、保育、教育、学生、子どもたち、すべて絵本に関わる人々が、ここを（その時は雑誌『ピーブー』でしたが、今はこの絵本学会を、でしょうか）コンビニエンス・スクエアとして、討論や研究、勉強の場とすることが望ましい」と述べられました。

太田大八氏はその後『ピーブー』誌で4年後1994年、絵本学は構築できるか、という問い合わせられて、それを中川素子氏が具体化に向けて積極的に動き出され、さらに今井良朗氏が献身的努力を

傾けられて絵本学会が誕生にいたりました。

それはともかくとして、太田大八氏は絵本フォーラムという形の運動体として今ご紹介した夢を現実のものにしようとなさいました。それはけっして絵本を愛する人たちの親睦的な集まりを意味しておりません。と言って、世間に言うアカデミックの固まりのような学会とも違う、この精神を具体化したのがこのたびの絵本学会であると、ご理解いただきたいのです。重ねて言いますと、太田氏は絵本フォーラムという絵本の勉強会を考えられておられて、その夢はこの絵本学会に生かされているので、世に言ういわゆる学会なるものと少し性格を異にするもの、と私は認識しています。

最後に、ひとこと、絵本の源流をたどって一つの意見を申させていただくと、まず本であって、テキストとそれといっしょの絵すなはちイラストレーションのあるものといいますと、中世の写本、とりわけ装飾写本（イルミネイティッド・マニuskript）にいたします。書写本で一点作品ではありますが、イラストレーション芸術としては一つの頂点に達していました。そのアーティザンたちの精神とわざは、ブレイクやウィリアム・モリスやセンダックたちによってうけつがれてきました。

先にもふれましたように、15世紀半ばに活版印刷術が発明されて近代が始まると、本は大量複製時代にはいります。イギリスではキャックストンが『イソップ寓話集』をまず出しましたが、絵としてはきわめて稚拙ではありました。木版の挿し絵が185枚もついていました。これは、中世の光彩写本の伝統を受け継いで、本には挿し絵がつくことになっていたからにほかなりません。木版から各種の銅版へと複製の手段は多様化して、デューラーやレンブラントのような天才画家によってそれらの技法は芸術として磨き上げられてきました。

そして、17世紀半ばからは、ブルジョワジーの台頭で、経済の発展に伴って、教育や出版文化が活発になって、子どものための本が誕生することになりました。印刷の複製の技術が十分でなかった初期の頃は、手作りのような素朴な絵本しかありませんでしたが、やがて19世紀半ばを過ぎると、イギリスを先進として、今日も生きているばかりか、絵本の模範とされている絵本がクレーンや、グリーナウェイや、コールデコットによってクリエイトされはじめました。コールデコットの絵本を見ていますと、絵本画家はデッサンがきちんとできていなければならぬということをおしえられます。クレーンは後にモ里斯らとアートクラフト運動をはじめますが、絵本を通して読者の美的情操の向上をめざしました。クレーンとグリーナウェイの絵本からは、グラフィック・デザインの有効性というものを学べます。また、その時代をみていくと、絵本はまだからならずしも子どもだけの独占物ではありませんでした。むしろ社会全体の共有物でした。視覚伝達のツールとして生き生きとして人々の生活に機能していました。私たちは絵本の明日を考えるとき、このように先人の残した財産を大切にして、そこから多くを学ぶ必要があると思います。過去に学んで、今を工夫し、明日を切り開くという姿勢が学会であるからには、ぜひとも必要ではないかと思います。世は電子メディアの急速な普及でメディア・コミュニケーションのようすも実に多様化してきました。絵本はその中で埋没するではなく、新しい時代に新しい価値あるものとして位置づけていくのが、絵本に関心をもってきた私たちの今なすべき役割だと思います。絵本に新しい息吹を！ご静聴を感謝いたします。

## 絵本学会設立記念シンポジウム

### 「絵本とは」

#### ●パネリスト

太田大八（絵本作家）

駒形克己（グラフィックデザイナー）

長倉洋海（写真家）

松居直（福音館書店）

松本猛（ちひろ美術館）

#### ●司会

今井良朗（武蔵野美術大学）

今井：今日のテーマは、「絵本とは」ということで、進めていくわけですが、すでに先ほどの基調講演の中で、絵本とはということについての全体像、輪郭というものが、かなり具体的に明らかにされたと思います。日本の中では、絵本をとらえていくうえで、あいまいな点が多く、まだまだ総合的な視点を欠いていると思います。「絵本とは」というこの最も基本的なテーマは、実は絵本を考えるうえで答えを明確に出すことが大変難しいテーマだと思います。

今回あえて基本的なテーマに基づいたのも、絵本の核心にさまざま角度から触れてみたいということです。

今日お話ししていただく5人の方々は、日ごろ絵本に關りの深い方々ですけれども、それぞれ分野が異なり関り方も違います。そこで、分野が違うというところで、異なる視点から語っていただき、絵本の全体像を浮かび上がらせることができればと思っております。最初に、それぞれ15分ほどお話をいただき、後半の部分については、できる限り会場とのやり取りの中で、絵本について考えていきたいというふうに思います。おそらく、こういったことが今後、絵本学会を考えていく上でも重要なことであり、絵本学会の方向性なり、活動を見極めていく基盤になっていくでしょう。そういう意味では、今回第1回の大会は、おそらく絵本学会の方向性をきっちりと決めていくものになるのではないかというふうに思います。それでは最初に、太田さんからよろしくお願いします。

太田：先ほど吉田先生が話された中に、絵本学会の発端についてのお話がありましたが、『ピーブー』で最初に書いた時とちょっと様子が違ってきておりまして、というのは、当初はフォーラムということを前提に考えていたのですが、その後、中川素子さんから学会に移ろうという提案がありました。学会はちょっと早いんじゃないかな、フォーラムでいった方がいいんじゃないかなというやりとりもあったんですが、話を進めていくうちに、学会としてやっていこうということになりました。ただ、普通、学会というと敬遠される向きがあるんですね。学会という言葉に権威とか閉鎖性が感じられるからだろうと思います。それで、この学会はまったくそういうものではなくて、みんな平等に発言できるようにしよう、そういう学会にしようということなので、それならいいんじゃないかなと。

普通、学会というのは専門分野の学者が集まって研究し、目標を達成するための会合を開くわけですが、絵本という分野はまだ学問になっていない。天文学や考古学は確立された学問がありますが、絵本というのはまだ「学」になっていないわけです。それで、学会を作つて絵本学を何とか作ろうじゃないか、という意向だったと思うんです。

こういうことを始めたいきさつは、やはり、本の低迷というか子ど

もの本離れということがあります。今、子どもをめぐる環境も近代の文明が発達して便利になっていますが、本の低迷ということが、精神の低迷ということになりはしないかと心配に思っています。そういうことから、もう少し絵本というものの認識を広めたいということです。普通、絵本というものは、幼い子どもに与えて飽きちゃえば捨てられちゃうと、その程度の認識だと思うんですが、実は絵本は非常に幅広く、立派なものがいっぱいあって、美術館に入れられるような歴史的な価値のある本もある。本というものは、急に出版物として出てきたものではなくて、やはり歴史の中でずっと培われた土壌の上に成り立っているわけです。

それで、コミュニケーション・アートとは、まず、伝えること。伝えるということは、生き物の根元的な手段です。そういうことから考えると、まず最初に、絵というのは造形であり、本というのは媒体である。絵本の絵というのは、いわゆる筆で描いている絵だけではなく、立体、版画など、非常に幅が広いわけですね。それで、造形というものは、最初は石の上にもの形を写したり、ラスコーやアルタミラの洞窟に描かれたような壁画、そういうものが、まず造形として、人間がサルから人間らしくなった証だと思うんですが、そういうところから絵本の絵というものを考えていく必要があるん



じゃないか。それで、長い歴史の間にたとえば活字ができたり、言葉のほかに挿絵が入ったり、あるいは媒体自体が竹や木から紙ができたり、印刷、写真製版、いろんな要素が加わって進んできているわけです。そういうことを、絵本学というもので系統立てて見せる必要があると思うんです。美術史の面から見ても、近代の絵本にはいろいろな様式がたくさんてきて、たとえばアバンギャルドとかアール・ヌーボー、アール・デコなど絵本に非常に関係の深い影響を与えた様式があります。そういうことも絵本学の中に取り入れたい。

そして、そういうことを「絵本フォーラム」というものを軸としてやっていきたいと考えています。ここで大事なことは、記録をとっていくということです。会に出席できない人がその記録を読めるということが大事なんです。それがある程度きちんとやっていて、最終的には立派な厚い本ができるくらいのものになればいいなと考えています。

現在、絵本に関するいろいろな活動をしている団体がありますね。例えば、絵本図書館、絵本美術館、児童文学館、読み聞かせの会、手作り絵本の会、自治体の公民館、あるいは児童図書評議会など。これらが、絵本に関係する共通の場として連絡しあって、その力を蓄えていきたい、知識を得たい、というふうに考えています。これを推進するために、みなさんにも動いていただきたいのです。また、

『ピーブー』では絵本学会の活動を記録してジャーナリストイックなニュースとして伝えていきたいし、学会の会報も作らなければならない。そういうものが今後どういうふうに進んでいくか、みんなの力で広めていけば、多少は、運動体としての会という希望を持つていけると思っています。

今井：どうもありがとうございました。それでは、次に松居さん、お願ひいたします。

松居：松居直です。私は、ここに並んでいらっしゃるパネラーの方々と立場が違っております。出版社の人間でございます。元来は編集者でございます。17年間編集をいたしまして、その後経営をする中で、またその立場で、絵本の流通やプロダクションなどについて考えてきました。ですから、私は研究者ではありません。私が絵本について考え、いろいろ調べたのは、編集のためなのです。なぜこの絵本はこの時代に、こういうふうに作られたのか。そういう、一つ一つの絵本の成り立ちが知りたかったのです。どうしてこういうふうに編集したんだろうか。どうしてこういうページ割りをしたんだろうか。この印刷はいったいどうなっているんだろうか。そういうことを、一つ一つ興味を持って、そして中にはそれを和訳出版するわけですから、ということは本のとじを一回ぱらしてしまうということです。バラバラにします。そこに日本語をはりつけます。その作業の中で、私は実は相当絵本のことが勉強できたのです。ただ見るだけではなくて、なぜここにテキストを置いたんだろうか、どういう流れができているんだろうかということが、一度本を解体しますと、非常に面白いことがたくさんわかります。そういう角度で、私は絵本に興味を持ってまいりました。

もう一つ私が絵本編集者として非常に興味を持ったのは、日本の物語絵です。中学2、3年生の頃からです。京都おりましたから、絵巻物を見る機会は大変ありました。だいたい少なくとも3年生の頃までには日本の代表的な絵巻物は全部見たと思います。それらの展覧会もありましたから、よく興味を持って見に行きました。そういう中で日本の物語絵というものの面白さを知りました。それが、私が編集者になったときに、大変大きな力になりました。外国の絵本と違う表現の仕方。日本の絵巻物も、それから近世の日本の絵本などもそうです。もう一つ、中学時代に興味を持ったのは民俗学ですが、それも絵本を作るときには大変役に立ちました。

そういうものを総合しながら、手探りで、というのも1950年代の半ばというのは絵本についての本はほとんどありませんでしたし、絵本について教えて下さる方もいなかった。で、結局過去の本をきちんと見直してみる、いわばそれらの舞台裏を探ってみれば、なにか新しい表現方法ができるんじゃないかなということが見えてきたのです。そういうことで、編集者として、歴史的に本を見ることに大変興味を持ちました。

私は、歴史が好きだということもあります。縦の軸と横の軸でものを見る習性のようなものがあります。それで、過去・現在・未来という軸と、もう一つ横の広がりがあります。たとえば日本と中国、日本と韓国、あるいは日本とインド、日本とヨーロッパ、日本とアメリカ、こういう横の軸が、絵本の編集をしているとき、私の中にあるのです。その軸の交わったところで、自分の仕事をやっている。意識してやっているわけではありませんが、結果的にはそういうことになります。また、内外の古い美術館とか、フォークアート、そういうものも私はとても好きです。学ぶものがいっぱいあると思います。そういうものをどう生かして、日本の子どもたちの本を作れ

ばいいのだろう、ということを考えてきましたから、その中で、特に日本の絵本の歴史というものが、ほとんどはっきりしていないということがわかったのです。海外の本については、いろんな国の研究者がいらっしゃるから歴史もかなりはっきりしていますが、日本の絵本の歴史というのは、ほとんど体系ができていませんでした。それで、今のうちにははっきりさせておかなければいけない、ということを考え出したのです。今はそういう研究をされている学者がいらっしゃいますから、そういう方たちの経験を生かしていくけば、日本の絵本の歴史、特に近世の歴史は、非常によくわかるんじゃないかなと思います。いろいろ面白い、興味あることがありますから、そういうことを一つ一つ経験しながら日本の絵本の歴史をひもといてみたいと思っております。今はそれはまだできていませんから、学会という形が取られれば、そういうことも実現していただきたいと考えております。そのあと、例えば1920年代あるいは1930・40年代、そして戦後の時期、さらに今度は、戦後にたくさん絵本が入ってきて、日本の絵本や児童誌がいったいどうなったのか、どうそれを利用したのか、どう消化したのか、それをどう表現したのか、ということも、これからみなさんと一緒に勉強できたら面白いな、と考えております。

で、以前1920年代展というのを出しましたが、実はそれは、私の構想の中では1930年代展の前哨戦といいますか、入口だったわけです。どうしても1930年代の日本の絵本をはっきりさせたい。つまり、なぜ戦争の方に傾いていったのか。戦争の方へ行くときに、日本の絵本はいったいどういう役割を果たしたのか。内容的には、かなり先取りしていると私は思っております。いつの間にか子供達の間にもそういうものを作り上げていく役割を、日本の絵本はしていると思います。そういうことは、もう二度とやりたくない。だからこそ、こういうことははっきりさせておきたい。で、こういう言い方は大変申し訳ありませんが、講談社の絵本の研究が何もされていない。どういうわけか、まったくされていません。しかし、これほど大きな影響を与えたものはありません。そこに何が、どういう怖さが、どういうあらましがあったのかということをはっきりしておかないと、うっかりすると、私たちは同じ轍を踏むと思うのです。ですからそういう意味では講談社の絵本についての共同研究もやらなければいけないので、という気がしています。戦争と絵本は切っても切れないものです。これは日本だけではありません、ドイツでもそうです。そういうことをはっきりさせておかないと、本の出版をする上で、大変大きな過ちを犯すということもあります。私は戦中派ですから、どちらかというと戦争責任を感じる方です。その一つ一つを、絵本の歴史の中で確かめなければならないと考えております。

それからもう一つは、月刊絵本誌というのは日本独特のものです。海外にはそれに近いものはほとんどありません。かつてチェコスロバキアにありましたが、今はもうありませんし。で、どうして日本では月刊の絵本の雑誌が発達したのか、しかもそれはものすごい発達をしたのです。1914年に羽仁もとこ先生が『子供之友』を作られて以来、1922年に『コドモノクニ』が出て、1927年に『キンダーブック』というすごい企画が出されている。そして日本では津々浦々に、家庭に絵本が入るという文化を作り上げてしまいました。これは歴史の上での大変大きな変革といえます。なぜ日本で、特に家庭教育や幼児教育と絵本が密接に結びついたのか。そこに、日本の絵本全体の特色があるような気がします。そのことによって、

非常にイラストレーションが発展しているのです。初期の『子供之友』には、竹久夢二や武井武雄らが描いている大変面白い絵本があります。そういうものが、また変化していくという、そしてそれが戦後はどうなったのかという問題も、私は持っております。ですから、月刊絵本誌というものを無視して日本の絵本の歴史がわからないでいると、日本の現代の絵本の状況もわからない。単行本の絵本がどのくらい普及していたのか。たとえば、ものすごく評価の高い、小さな小型の絵本があります。内容はものすごくいい。しかしそれは、どのくらい印刷されていたのか、どのくらいの子供が読んだのか、わからない。そしてそれがどういう影響を与えたのか、それもわからない。出版されたことはわかっているのですが、その社会史的な意味というものはわかりません。当時のイラストレーター、あるいは出版社、編集者。そういったことも、もっとはっきりさせたいという夢を、かねがね持っていました。そういう意味で、私は絵本学会という集まりに、本当は学会というのではあまりなじまないんですが、参加させていただくことになりました。

**今井：**ありがとうございました。それでは、長倉さんお願いいたします。

**長倉：**こんにちは、長倉です。カメラマンというか、写真を撮っています。ここにいるみなさんの中でちょっとぼくは浮いてるのかな。外見の問題じゃなくて(会場笑)、絵本と言われたときにちょっと自分自身はピンとこない、というのは、僕は最近、アマゾンの原住民を撮った『人間が好き』という、写真と文章の、まあ絵本というものに入るとは思うんですが、それと『おおきな一日』という世界の子ども達を撮った本を出しています。そういうご縁で今日ここにいるのですが、私の写真家としてのささやかな提言というか、絵本についての多少の思いがあるので、最初にスライドでこんな写真を撮ってきたということをお見せして、その後少し、話を聞いてもらいます。

僕は子どもの写真だけを撮ってきたわけではなくて、大人も撮っています。ただ大人を撮ろうとしたときに、いつもそこには子どもがいる。そして子どもと大人というのは切り離されたものではなくて、やはり一緒に生きていくんだ、ということをすごく感じたんです。だから大人もいますし、子どももいます。

(スライド)これは中米のエルサルバドルという国ですが、そこでは子どもたちが市場で、朝早くからお母さんたちとすごく働いています。これは市場で小さな露天を作って、お母さんと野菜を売っていた女の子です。夕方になって家に帰ると、お母さんが、帰る前に自分の家のいろんな食料、材料を買いに行った時に、お母さんの帰りを待っている女の子です。

(スライド)これはちょっとつらいんですが、エルサルバドルの、私がよく行く難民キャンプで死んでしまった、生後3ヶ月の赤ん坊です。このときも、その写真を撮りに行ったというよりも偶然早朝そのキャンプに入ったときに、眼を泣きはらした女性から声をかけられて、自分の子どもが死んだので写真を撮ってほしい、自分の子どもの顔をいつまでも覚えておきたい、ということで、彼女に頼まれて、そのキャンプの、段ボール箱で作ったような壁のある部屋なんですが、その天井から光が差し込んで、その中で眠っているような赤ん坊の写真です。まだ朝早くて棺が届いていなくて、写真を撮っている間にキャンプの子どもたちが一人二人三人とやってきて、キャンプの外で摘んできたきれいな花を、その子の棺代わりに置いていく、ということをしていました。

(スライド) これもエルサルバドルです。この国では内戦があって僕はそれを取材していたんですが、先ほどの難民キャンプで赤ん坊が死んだように、キャンプの中ではやはり体の弱い老人が最初に死んでいく。赤ん坊も死んでいく。そういう中で、人々が死に対して麻痺しているんじゃないかなと、僕は平和な日本、死が滅多にない日本、戦争がない日本から来たときに思っていたんですが、実際に人々といて生活をずっと見ていくと、当たり前ですが、僕たち、あるいは僕たち以上に、生まれてきた命をいとおしむし、そして死に対して非常に悲しむ人々がたくさんいました。

(スライド) これは難民キャンプの教会なんですが、その中で、ちょうど生まれてきた赤ん坊を難民の少年たちが囲んでいる写真です。赤ん坊の足にピンクのきれいなソックスがはかされています。これはお母さんが産まれてくる子供のために、キャンプの中で一所懸命糸を手に入れて編んだそうです。

(スライド) これは、お母さんが市場で働いていて、その間子どもたちが近所で遊んだり、箱の中で寝たり、周りにおしつこをしたりするんですが、この子は、土手のすぐそばに教会があってそこで遊んでいました。裸でいたのは、お母さんが市場で働いているのでおむつをするのは面倒くさいということで、裸で放ってある。この子は教会の中でもおしつこしたりしながら、座り込んでいた。ちょうど後ろに十字架が見えていたので撮った写真です。



(スライド) これは山岳地帯の農村部に行ったときに、山道で出会った少年です。収穫したバナナを持って、これから下の町に売りに行く、そんなところでお会いました。



(スライド) これは14歳のカルロスという少年です。彼と出会ったのは下町の小さいビリヤード場です。そこで大人たちに混じってビリヤードをしている少年に目を

引かれて、なんとか仲良くなってしまった写真なんですが、彼は両親がいなくて、大人たちに混じって賭ビリヤードをして生活費を稼いでいたんです。普段は本当に優しい顔で、女性のような少女のような顔をしているんですが、プレイになるとすごく真剣な表情、夜叉のような表情になる。彼はここで寝泊まりして、よく段ボールの上や木箱の上に丸まって、ランニングシャツ一枚で寝ているところを見たり、あるいは何年かあとに訪ねたときには、盗みをして刑務所に入ってしまったという話を聞きました。

(スライド) これは、ちょっとまた後でお話ししたいんですが、エルサルバドルで政府軍のヘリコプターがゲリラの支配地の上を飛んでいる写真です。

(スライド) これは貧民街といわれる地域で出会った、瞳のきれいな少女です。

(スライド) これは私が、彼女が3歳の時から現在16歳ですが、十何年かにわたって撮り続けているヘスースという女の子です。難民

キャンプ、先ほど言ったように段ボールでできた壁の間から顔を出している少女。彼女は3歳、あるいは5歳10歳15歳というふうに撮り続けてきました。

(スライド) これはアフガニスタンの、鼻水を垂らした男の子です。学校には行っていません。お父さんに「どうして行かないの?」と聞いたら、学校が遠いからだと言うんですが、今度この子に聞いてみたら、「ぼくは学校に行かないけれど、ちゃんと家の手伝いをしている。お父さんを手伝ってるよ」と、ちょっと胸を張って言ったんです。それが印象に残っています。



(スライド) これは南アフリカでゴム跳びをしてた女の子たちを撮ろうとしたとき、遠くから撮っていたんですが、みんなカメラにすぐ気がついて、自分の得意のポーズ、つっぱりをしているような子もいるし、タレントのように、あるいは歌手のように歌って踊りだしている。そんな子どもたちです。

(スライド) これは南アフリカで、水道も電気もない家がたくさんあって、800万人が生活している。そういう人たちは共同水道で水をくむんですが、蛇口がよく閉まらなくて水が噴き出している。そんな水道で暑いときに水を飲んで、口にいっぱいこぼさないようにため込んで、ビシャビシャになりながら、水をこぼさないように上を向いて歩いて家に帰る女の子です。

(スライド) これは、鼻垂らして鼻が筋を作っている。日本にも昔よくいたんですが、夕日で鼻水、鼻筋が輝いている。(会場笑)

(スライド) これは僕が南アフリカで取材した金鉱労働者、ソロモンというところの労働者とリナという奥さんです。彼らは1年間に3日間だけ休みを取って、故郷に一緒に帰ったときに、記念撮影で二人で肩を組んだときに、彼らの子どもたちが横から口笛を吹いて二人をひやかしている。そんな場面です。

(スライド) これは、ソロモンという金鉱労働者の村です。学校にももちろん行ってますが、学校に行くときはきれいな服を着ていくけれど、帰ってくるとすぐそれを脱いでたたんで、野良着というか汚い服に着替えて、これから羊を追いに行くところです。彼はお父さんがいない間、14頭ぐらいの羊を全部世話している。それと、仕事に行く前にたんぽを踏んで驚いている、ゾラという名前の9歳の弟です。

(スライド) これはダムに沈んだ自分の村を見ている、アマゾンのインディオの人たちです。

(スライド) これはアマゾンで、小さな弓を持って浮かび上がってくる魚を待っている、狩をしている男の子です。

(スライド) これは芋畑の中でカメラに照れて、伏せてしまったタニヤというインディオの女の子です。

(スライド) これは岩山にサルが登った、というのは、サルは木しか登らないんですが、このときは岩を登っているっていうんで人々が飛び出してきている。みんなでうれしそうに、楽しそうにサルを見

ている、そんな場面です

(スライド)これは、屋根から差し込む光の中で眠っているクリカシというインディオの赤ん坊です。

これでスライドは終わりです。

それで、先ほど突然ヘリコプターの写真が出ましたが、あれをどうして入れたのかというと、僕は紛争地でいろんな子どもたちの写真を撮って日本で発表したんですが、日本については僕は悲観的だったんです。日本の環境、あるいは大人社会、そして子どもたちの表情のなさ、特に都市部においてですね。そういうのを見て、日本の子どもは紛争地の子どもとずいぶん違う、輝きが少ないというふうに思っていたんです。それが大阪の高槻というところの幼稚園の先生から、僕の写真展をやりたいという呼びかけが何度もあって、僕は、こんな戦争の写真を子どもたちに見せてもしょうがないというふうに思っていたんです。が、その先生があまりにも熱心なので、そこで写真展をやりました。で、僕が一番記憶に残っているのは、あのヘリコプターの写真を見て、一人の5歳くらいの女の子が、こんな大きな銃で撃つたら、隣の桃組の何々ちゃん、彼女の友達なんでしょうけど、何々ちゃんは死んじゃうよという話をした。そして、ゲリラが休戦中の正月のダンスパーティーで踊っている写真を見て、あ、この人たちは今、何か幸せそうだ、戦争の中でも幸せそうだ、という話をしたということを先生から聞いて、僕は、日本の子どももすごいなあと、やはりすごい感受性があると思ったんです。というのは、僕はいろいろな国に行って一番思ったこと、そして日本についていつも不満に思うのは、大人たちは外国人と出会ったときに、相手にフィルターをかけてしまう。逆に言うと子どもたちは、フィルターがなくて、何かの絵を見たときに、すぐ自分の友達、あるいは自分のところまで引き寄せる力がすごいあるんだなと。アマゾンの先ほどの芋畑で寝てる子どもの写真を見ても、大人であれば、こんな生活をしている人がいるよね、と言うかもしれないけれど、その幼稚園では「あ、私もこんなところで寝てみたい」とか、「この子たちと友達になりたい」とか、何かぜんぜん遠くのアマゾンの人じやなくて、自分のすぐ横にいるような、そういうとらえ方をすぐできる。

ですから、先ほど僕は日本に悲観的だと言いましたが、大人社会がある意味で引き起こした問題がたくさん出てきて、それが子どもたちをある意味でさいなんんでいる、子どもたちの感受性を大人になるに従ってどんどん奪っていくという現実があると思うんです。けれども、その幼稚園で写真展をやった中で、日本の子どももまだまだ希望があると、こういう言い方はおかしいかもしれません、思いました。

そして、いろいろな国に行って大人の写真を撮ってきましたが、素敵な大人、僕が本当に惹かれた大人は、すごく笑顔がよかったというだけでなく、魅力があった。そして相手をフィルターを通して見なかった。僕という、日本という国から来たフリーランスの何の権威もないカメラマンを、信用して、その人間を見て受け入れてくれた、そのことにすごい喜びを持っていますし、また彼らはいつも将来のことを考えているんです。将来、未来を生きる子どもたちのことを考えながら、今の苦しみ、今の世の中を変えていかなければならないという考え方をしている。そういう大人たちを見たとき、僕は、何かこの人たちは相手を引き込むような笑顔を持っているし、もちろんそれは子どもにも僕たちにもあるものかもしれません、彼らが、未来を見ている、そして子どもの心を失っていないと思っ

たんです。で、どうしても僕たち大人は、子ども・大人と切り離して考えがちなんですが、素晴らしい大人というのは子ども心を失っていない。もちろん子どもの持っている残酷さとか、いろいろ問題もあって、子どもはすべてきれいなわけでも素晴らしいわけでもなく、いろいろあるのでしょうか、それを少しずつ変えてゆくことはできる。いろんな絵本とか、写真とか、ここにいらっしゃるみなさんが自身の仕事でできるわけです。そして、子どもの良さ、愛嬌、フィルターにかけないで自分に引き寄せられる力、そういうことを考える場として、僕はこの会が、みなさんと一緒に作っていけるようなものになるといいな、と思います。

ちょっと時間がなくてまとまりがありませんが、もう少し言わせていただくと、たとえばアマゾンで一番僕が最近感じたことは、彼らは日本から見ると物のない生活をしてますけれど、祖先を、あるいは過去をすごく意識している。教えられたこと、学んだこと、そして生活の知恵、いろんな事を自分たちが受け継ぎ、それを子どもに伝えようとしている。過去から未来につながろうとしている。今の日本は、いろんな物が溢れていますが、僕たちはただ自分の人生を生きてそして死んでしまえば終わるという、刹那的な生き方を余儀なくせざるを得ないような社会体制、メディアなどを含めて、そういうものが実際あると思うんですね。けれども、死んでも終わるじゃない、あるいは先ほど松居さんも話されました、過去から何か人間の喜びとか悲しみとか、生きた知恵、そして苦しさを乗り越える力、そういうものを学んでいける、そしてそういうものを僕たちが自分で作り直して、それを子どもに伝えていくことが大事なんじゃないか。何度も言うようですが、自分の代で終りじゃない。つなげていく中に、アマゾンの子どもたちは生きていた。彼らの瞳は本当に青空を映したような深い瞳で、そういう瞳をしていたというのは、きっとそういう中に身をゆだねることができる幸せがあるんじゃないかなと思うのです。

**今井：**どうもありがとうございました。それでは駒形さん、お願いします。

**駒形：**初めまして、駒形です。実は私も正当な絵本作りを継承する人間とは思えないんですが、ともかく今日、絵本学会設立ということで、積極的に参加を申し出たわけです。私の絵本についての考え方や制作にまつわるエピソードを、スライドを交えながらお話ししていきたいと思います。

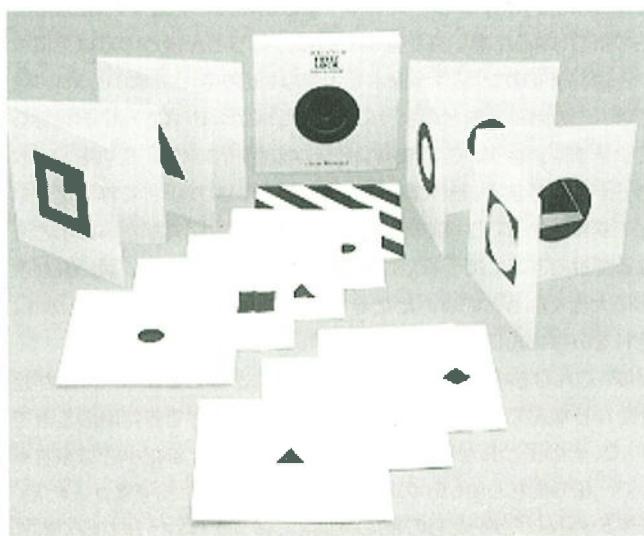
まず、こちらに小さな黒い丸のカードがありますが、実はこれが私が『Little Eyes』シリーズで作った最初のカードです。(正方形で三つ折り、中心に黒い丸が描いてある。)もちろん後ろの方は見にくいため、私は準備よく大きなものを作っていました。では、このカードをどのように広げていくか、みなさんにお見せしていきます。まず、ここに黒い大きな丸があります。これを、一枚カードを開きます。そうするとただ単に黒い丸が小さくなるだけなんですが、さらにこれを開いていきますと、黒い丸がさらに小さくなるだけです。ただそれだけです。逆に閉じていくと、黒い丸が次第に大きくなるという、ただそれだけのカードをなぜ作ったのか。それをみなさんにお説明したいと思います。

実は、こんなものを作り始めたのは、私にとって重要な出来事が起きたからなんですが、それは私に初めて子どもができた時のことです。で、その子どもが3ヶ月の時、見た目にはまだ小さな赤ちゃんで、私も何をしていいのか戸惑うばかりだったんですが、ただ、生後3ヶ月ながら子どもの視点が非常にはっきりしっかりしてきて

いるわけです。時折私の顔をじっと眺める。それがまるで親父の品定めをしているようにじっと眺められるものですから、こちらの方も、いったい何を考えているんだろう、何を見ているんだろうと非常に興味を持ち始めて、それ以来このような手作りのカードを作っては子どもに見せて、私たち親子のコミュニケーションが始まったわけです。それではスライドの方お願ひします。

(スライド)一番最初に作ったカードは、先ほどお見せしたいわゆる「おっぱいカード」と呼んでいるんですが、母親のおっぱいは妊娠とともに張りを増して、色もすごく濃くなってくるんですね。黒々とはっきりしてくる。それは視線がまだおぼろげな子どもにとっても、大変わかりやすく、さらに母親からのアイコンタクトのように私には思えるんです。子どもは、たとえそれがぬいぐるみであろうと、目のないものにはまるきり興味を示しません。つまり、本能の中に目と目を合わせる行為が、コミュニケーションの第一歩として刷り込まれているのではないかと考えました。私は子どもの前でカードを広げます。大きな丸が小さくなります。そしてさらに開いてゆくと、黒い丸がさらに小さくなります。極めてシンプルなカードですが、遠近感という視覚のリズムが体験されると同時に、カードを開いていくリズムは、私自身そのもののリズムなんです。人はそれぞれ話すテンポやリズムが微妙に異なります。子どもがゆったりと安心できる状態の中で、まず私のリズムとその間合いを伝えていく。これがコミュニケーションの第一歩ではないかと言うふうに考えたわけです。つまり、その中で子どもは私自身を認識し、お互いのコミュニケーション作りへと発展していくわけです。たとえば動物たちの間でも挨拶をするといわれています。それは「あなたには危害を加えませんよ」という、信頼関係の形成に必要なのです。最近日本の子どもたちに欠けているのは挨拶だと思うんです。先日フランスでワークショップをやったんですが、子どもたちが非常に元気なんです。元気に挨拶してくれる。私たちはまずコミュニケーションをする時に、挨拶が重要じゃないかというふうに思います。

(スライド)これは、コントラストの強い黒と白をいろいろまとめた『Little Eyes』シリーズの第1巻です。生後半年を過ぎた頃、それまで一度も反応することがなかった「いないいないばあ」に、突然子どもが反応するようになりました。その成長ぶりにあ然としたわけなんですが、おそらく、記憶の回路が次第につながり始めた証拠だと思いました。つまり「いないいないばあ」で反応するというのには、手で顔を隠している状態、それから手を広げておどけた顔をし



て見せる状態、それぞれの場面が記憶できているわけなんです。その変化が楽しいので、赤ちゃんは大笑いするというふうになると思うんです。そんな子どもの反応がヒントになって作ったのが、この「いないいないばあ」のカードです。

(スライド)カードを広げていくと、それまでに隠れていたものが次々と現れてくる仕掛けです。たとえば、青のストライプの下には赤のストライプが隠されている。そしてさらに開くと、赤と黄色のストライプが現れてくる。で、これらを、同じように12枚のカードのシリーズにまとめたのがこれらの作品です。

こういったカードの試作を、子どもの成長に合わせて作り続けてきたのですが、子どもが一人歩きを始めたある日、私は子どもの手をとって散歩に連れ出しました。そして鮮やかな緑の葉っぱを持たせて「葉っぱ」と教えた。つまり言葉を教えようとしたんですが、すると子どもは繰り返し「葉っぱ」と言えるようになった。で、次の日に同じように葉っぱを持たせて、今度は色の名前を教えようと思い、「みどり」、で「葉っぱ」と教えたわけです。そうすると子どもは、「みどり」「葉っぱ」と答えられるようになりました。なかなか賢いなあと、親バカではあったんですが(会場笑)、次の日に子どもと散歩していると、突然子どもが葉っぱを指さして、「みどり、みどり」と叫ぶんです。これには非常に参ってしまったんですが、そこで作ったカードが次のカードです。

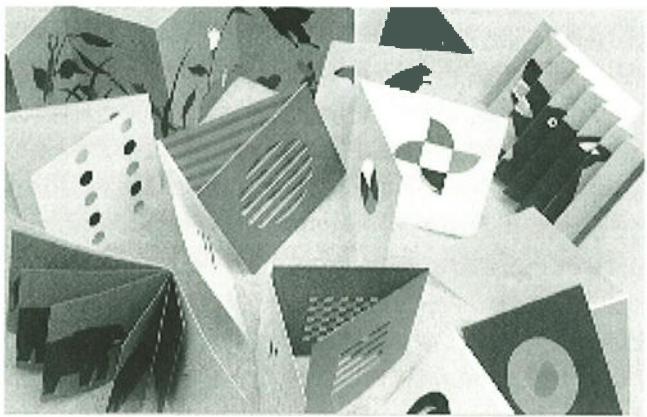
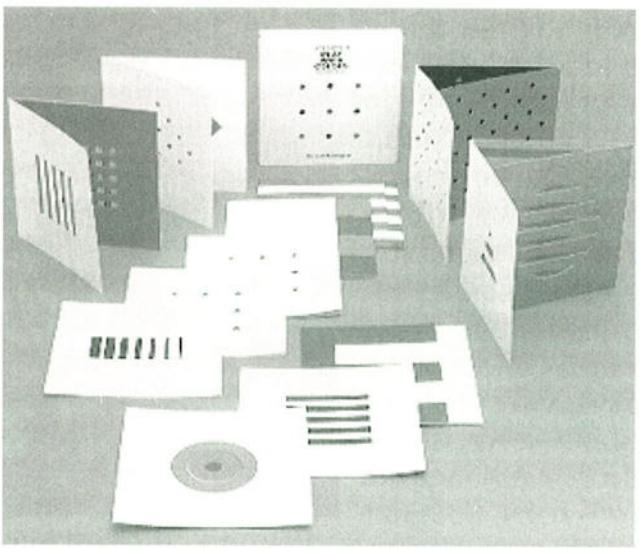
(スライド)真ん中に青い丸があります。その青い丸を広げていくと、青い丸が青い鳥になる。さらにページを開けていくと、青い鳥が青い空に飛んでしまったという、そんな話になるんですが、これらのものを、基本的な12色の色を選んで、たとえば茶色や黒、オレンジ、黄緑、そういうものをシリーズにまとめたものが、次のスライドです。

(スライド)『Little Eyes』のシリーズは最終的に全10巻としてまとめたんですが、これらのカード絵本には、いっさい言葉がありません。それは、その子の親ならではの言葉で表現してほしいと考えたからです。つまりこちらから100%全てを渡してしまうではなく、親なりの言葉で子どもと接してほしい。あえて数十%不足しているものを逆に親の考え方で補ってもらえたなら、そんな思いで、このシリーズを作りました。

(スライド)これが、『Little Eyes』シリーズ全10巻です。でそのほかに制作した絵本は、次の『ぼく、うまれるよ!』という絵本なんですが、

(スライド)この本の制作のきっかけは、実は私の子どもが4歳の時に、母親のおなかの中にいたときの記憶を話してくれたんです。ふわふわ浮いているような感じだったとか、そのような話をしてくれたんですが、半信半疑ながらいろいろ調べていくうちに、おなかの赤ちゃんが実は非常に積極的なメカニズムを持っているということに気がついたんです。たとえば出産時における陣痛ですが、実は胎児によってその陣痛を引き起こすホルモンが作られている。それがへその緒を通って母親に送られるということです。つまり、「ぼく、うまれるよ!」というサインを子どもの方から発しているわけです。私たちは、ついつい子どもたちを受け身一方としてとらえる傾向がありますが、子どもたちは、むしろかなり積極的だと思うんです。

(スライド)次のスライドですが、これらの色の本は、子どもたちにさまざまな紙の質感を伝えたいということと、それから、一口に青といっても実はいろんな青があるわけです。そういうことを、ス



トリーと重ね合わせて作ったものがこれです。このようなたくさんのカードで構成されたものがまだあるんですが、これらは、カードを裏返したときに思いがけない変化を楽しめる。つまり、子どもたちがおやっと思うところに、好奇心とか想像力が触発される仕掛けがあると考えております。それで、そういう子どもたちの想像力を刺激するワークショップの教材として、ものを作っているわけです。

(スライド) 私の絵本の展覧会が1995年、フランスのリヨンを皮切りに、ストラスブルグ、パリと巡回したのですが、この展覧会では絵本展示ばかりではなく、同時に子どもたちのワークショップも行っています。この写真は、パリで開催されたものなんですが、本来小さなカードを大きくして展示するなど、視覚的な効果を配慮して展示効果を考えていました。

(スライド) これは、その時に合わせて制作した展覧会の案内状です。これはパタパタとページをめくっていくいろいろな形が現れるという仕掛けになっているんですが、これを大きなマットに作り上げました。たたむと1メートルくらいですが、広げると4メートルにもなります。また、裏返しにすることもできます。これを会場に展示して、子どもたちが自由に遊べるようにしました。その会期がおよそ1ヶ月ぐらいだったんですが、最初はパンパンだったマットが終わった頃にはペちゃんこになってしまった、というふうに後から聞きました。

(スライド) これは、先日フランスで子どもたちを対象にワークショップを行った写真なんですが、私たちのワークショップは、まず子どもたちにある共通のカードを渡します。スタートと同じにす

ることで、自分ならこうするという独自の発想が生まれてくるわけです。

(スライド) 次は、子どもたちにいろいろ内容について説明をしているところです。基本的には、マーカーとかクレヨンといったわりと簡単にできる画材ではなく、あえて紙を切ったり貼ったりという、いわゆるコラージュの手法で作品を作り上げていってもらいます。

(スライド) これは子どもたちが実際に制作している場面です。

(スライド) 私たちはこのワークショップに2時間から3時間かかるんですが、最初の説明に20から30分、それから制作に1時間。

(スライド) これはみんなで作品を発表しているところで、プレゼンテーションと我々は呼んでいるんですが、これに30分くらい費やします。ですからトータルで2時間くらいかけて行われるんですが、子どもたちは非常に集中して、頑張って自分たちの作品を作り上げています。

(スライド) このように、一人一人作品を発表していきます。これでスライドの方はひとまず終わりです。

ワークショップのエピソードをいろいろお話ししたいと思います。11月にやはりパリでワークショップを開いたんですが、その時に残念ながら時間の制約があって、1時間しかなかったんです。それで我々の説明はかなりテンポを早くしたんですが、そうすると最初子どもたちは、ぽかんとしているわけです。で、パリのスタッフとお母さんたちに、子どもたちがわかっていないんじゃないのか、できれば説明のときの見本を前に飾ってほしいと言われたんです。ただ、見本を飾ってしまうと、子どもたちの意識の中に真似をするということが生まれてしまうので、私はスタッフの人たちに、もう少し我慢してくださいとお伝えしたんです。すると15分、20分くらいしてから、突然子どもたちが一齊に制作に取りかかったんです。つまり子どもたちは、何もわからずにぽかんとしていたわけではなくて、一生懸命考えていたんですね。ところが我々大人は、それを見ると、理解していないんじゃないのかと思う。つまり、もう少し我々が待っていることが、子どもたちにとって非常に大事なのではないか、子どもたちのメカニズムの中には、非常に積極的なものが本来生まれたときから備わっているんじゃないかと思うのです。

で、最後にこれだけはお伝えしたいのですが、私は、自由というものは決して与えられるものではなく、獲得していくべきものではないかなと思うのです。いろいろな考え方があると思いますが、ただ、たとえば子どもたちに「自由にしなさい」と言うのは、実は非常に勇気がいることなんです。でも、ある程度のキャッチボールをこちらが考えていくと、子どもたちはそれなりにしっかりと反応してくれるのです。実に易しいんですね。それは、長倉さんもおっしゃったように、まったくフィルターなくして人間と接することができる、それを実は、我々大人の概念がともすると邪魔してしまうんじゃないかなと思うんですね。ですから、私は絵本を制作していく上で、子どもたちを受け手という扱いではなくて、むしろ積極的に作り手に変えていくような、そんな絵本をこれからも作っていきたいと思います。

今井：ありがとうございました。それでは、松本さんお願いします。

松本：ちひろ美術館の松本です。実は、まだ3週間ばかり前なんですが、安曇野に「安曇野ちひろ美術館」というのを作りました。これは十年くらい構想を考えてやっと出来上がったものなんですが、その中に、いわさきちひろの展示ももちろんありますが、世界の絵本画家の展示と、それから絵本の歴史の展示室というものを作りま

した。今日はスライドをいくつかその中から持つてまいりましたので、それを見ながら、僕なりに絵本とはいっていい何なのか、どういうルーツがあるのか、ということをお話しできればと思います。

(スライド) 絵本というものが、まず絵と言葉によって一つのストーリーを形作っていき、それが紙の上に表されたのだと考えますと、その起源というのはやはり古代エジプト、B.C.6600年くらいでしょうか、その中の『死者の書』というところへたどり着くのではないかと思います。このスタイルのものは、古代エジプトだけではなくて、そこから発展していろいろな所で見られます。たとえば、マヤ文明やインド、イスラムの中にもこういうスタイルのものがあります。こういった絵巻物の形式の中に、さまざまな絵本の原点があるのではないかと思います。



ないのですが、非常に高いレベルの技術が発見できる。そして、装飾的に非常に細かなところを見ると、そこから出てくる物語というものを感じることができます。

(スライド) これもやはり写本の一つ、これも複製で、オリジナルではありません。これなどもやはり、ブックデザインというものの美しさを本当に感じさせてくれます。

(スライド) これは、リチャード・ドイルの『妖精の国』です。もちろんその間にも、チャップブックなどたくさんの中があるわけですが、今なぜここまで飛んだのかといいますと、写本というものは、必ずしも子どものためのものではなかったからです。中世の教会で作られて、祈るときに開かれたものです。もちろん14世紀くらいに子どものための時祷書があったと、オズボーン・コレクションの方がおっしゃっていたことはあります、一般的には大人のためのものです。

(スライド) 『妖精の国』のカバーです。カバーは金文字の箔押しだと思いますが、非常に高価な、当時としても貴重な高価な本だったと思います。印刷技術としてもきっと非常に優れたものだったでしょう。ここに描かれている世界は、子どもたちが共有できる世界であることは間違いないのですが、当然それは大人にとっても大変魅力的なものだったのではないか、と思います。



(スライド) これは、ラッカムの『ケンジントン公園のピーターパン』の中の一つです。今も、イギリスやローマ辺りに行くと、切り離されたものも含めてたくさん売られています。非常に高い値段で、コレクターもたくさんいるようです。これも豪華本です。ですから部数がたくさん出たわけではないらしいのですが、大人のコレクターでもずいぶん收藏されている方がいるのではないかでしょうか。そういうふうに、ここに描かれている世界を、大人が、子どもだけでなく大人も共有できる世界が、絵本の中に非常に強くあったのではないかと思い、お見せしました。

(スライド) これは、ロシアのビリビンです。ロシアや東欧の絵本は非常にレベルが高いことが言われておりますが、これもやはり、ロシアの至宝といわれるよう、国民的な画家です。子どもの本のイラストレーターであるということと国民的画家であるということが、東欧やロシアでは一致しているといえるでしょう。いわゆる日本でいうと芸術院会員のような方たちが子どもの絵本をたくさん描いている、そういうことがむしろ当たり前のような状況である、ということを聞いています。

(スライド) これらの作品を通して、大人・子どもというレベルを超えた世界、技術的にレベルの高い作品というものが、実はイラストレーションの歴史の中には非常に多いということを見ていただきたかったのです。

(スライド) これは日本の絵巻物です。絵巻物は12世紀頃に最も普及したものですが、これは江戸初期のものです。何人かの研究者に見てもらったのですが、江戸初期とみていいだろうということです。室町期に出てきた御伽草子を扱っている作品です。絵巻というのは、松居さんも先ほどおっしゃっていましたが、いろいろな意味で示唆に富んだ、日本が作り出した独自の芸術と言っていいかもしれません。詞書きが先にたり、絵よりも後にある場合もあります。『信貴山縁起』とか、そういう作品にもいえると思います。また、『源氏物語絵巻』などを見ていますと、当時の吹抜け屋台というような社会史的なものも当然そこで発見できるわけですが、確かあの中には、お姫さまが寝ころんで絵巻をみている形があったと思います。で、そういうふうに見ている人たちがいたいという人たちだったのか、ということにも関心があります。もう一方で寺社縁起のようなものは、町の市勢の中に行って、お寺がどんな職業を、お坊さんがどんなことを行ったのかということを描いていますから、いわゆる子どもが対象だったということはないわけです。しかし、子どもがこれを理解できることも間違いないだろうと思います。

(スライド) これは、江戸の17世紀の丹絵本です。丹絵本というのは、「丹」は朱で「絵」はみどり、黄色も入りますが、これは義経記です。木版で墨線があり、それに手で簡単な色を彩色をしていく。それがかなりたくさん普及したということです。コメニウスの『世界図絵』が1670年くらい、17世紀ですが、それよりちょっと後ぐらいの時期に、日本ではこういう形の絵本ができていました。上



の方の方でもかなりたくさんのが出ていた。これは鑑定を受けていないのでオリジナルかどうかわかりません。

(スライド)この手の江戸の絵本類というのは、それぞれ非常に面白いものがあります。百科事典を読むと“婦女子のためのもの”という表現がある場合もありますが、必ずしもそれだけではなかったのではと私は思います。この手のものは、明治の後刷りのものがかなりあるようです。いずれにしろ、町民の文化というものがやはり非常に面白かったということがいえると思います。

(スライド)これは明治に入って、縮緬（ちりめん）本という日本で作られたものですが、外国人のお土産用、あるいは外国で売られた本です。和綴じの形になっていて、わざわざ日本風を強調するためには（ちぢみ）の紙に印刷されています。

(スライド)これも典型的にお土産という感じで描かれたのかなと思いますが、これが果たして松居さんがおっしゃったように、後の絵本に影響を与えたかどうかはわかりません。少なくともこの時期にかなりたくさん出版されたということはわかっています。明治から大正にわたって、いわゆる江戸期の絵本のスタイルがなくなっています。そして大正に入って一気に変化し、外国の影響なども見られるようになりました。これでスライドは終わります。

今のスライドの後のことばは、先ほどの松居さんの話につながっていくのだと思います。私がここで申し上げたいことは、実は絵本の歴史というものを考えたときに、絵本の歴史は、人類の歴史が作り出してきた美術の歴史というものと非常に深くつながっている、あるいはまさにその本道ではないかなという気がすることです。たとえば教会の壁画を考えてみても、あれはやはりある種のイラストレーションといえるのではないかと思います。ところが、私たちが美術史として勉強するものは基本的にはファインアーツの歴史だと思います。なぜイラストレーションの歴史を今大学で教えられないのか、と考えると、やはり画商が作ってきた美術史というものがあるのではないかと思います。そして現代の文化というものを考えるときに、たとえば、イラストレーションの歴史の一つの発展形態というのは、漫画もそうだろうし、映画もそうだろうし、絵本もまたその中の一つである。さまざまなものでのイラストレーションの歴史の発展形態があって、ところが先ほどの絵巻物にしても、絵本にしても、中世の時祷書にしても、みんな専門分化して歴史が研究されているような気がします。

今回絵本学会というものの中で、それらの一つをいろいろな角度から専門の方たちがディスカッションしたり、いろいろな方向性を出しながら、過去から現在までがつながっていき、そしてこれから新たに作られる絵本がさまざまな文化の歴史の上に成り立つんだということを自覚して、あるいは、そういうところからさまざまなものを吸収してやっていけば、素晴らしいんじゃないかなと思います。

今井：どうもありがとうございました。

5の方にお話をうかがったわけですが、期せずして、キーワードとして「歴史」ということが何人かの方から出てきました。それと、いわゆる子どもの世界、人類の生活そのものといった原点に立ち返ったところを見せていく、そういう話も出てきました。

この後会場とのやりとりを含めて、今までの話を基にしながら、いろいろな形で、絵本全般についての考え方や意見の交換をしていきたいと思います。

(休憩)

今井：では、質問用紙を何枚かいただきましたが、全てにお答えす

るわけにはまいりませんので、可能な限り、関連のあるもの、今日ここでみなさまとお話しすることに意義があるだろうというものを選びながら、進めていきたいと思います。

まず最初に、「絵本は子どものためのもの、という一般にある共通認識をどのように考えられますか。学会設立の趣旨からあえてはずされた意図をお聞かせ下さい。」という質問です。

これはかなり重要な問題だと思いますので、少しこのことに関連しながら、パネリストの方々にお話ししていただき、会場からもご意見を寄せていただきながら、考えていきたいと思います。ただ先ほどの松本さんのお話の中に、子どもたちが共有できるものは大人にとっても魅力的なものだとありました。これは逆もあると思うんですね、子どもにとって魅力的なもの、それは大人にとっても共有できるものである。ほかの方々からもそういう言葉が出たと思うんですが、大人になるに従って、子どものような純粋な心がだんだん失われていく、ということが言われていました。たとえば、学会で子どもの本、絵本というふうに考えていく場合、必ずしも子どもの本に限定せず、幅広い分野で捉えていいといいんじゃないかという考え方方が当然あると思うんですね。私は必要だと思うんですが。

ただもう一方で、なぜ絵本が子どもとの関係を保っているのか、ということを考えたときに、実は絵本を作るということ自体に、まずはっきり子どもに向かっているという姿勢が、作り手の中にあるわけです。このことは大変重要なことじゃないかという気がします。何年か前に、『子供の館』の中で、多木浩二さんが絵本について書かれていたんですが、その中で、いろいろなグラフィックのメディアを見ていったときに、絵本というのは、とても奇跡的なメディアである。それはなぜかというと、他のメディアは確かにそれぞれ対象というものが絞り込まれているわけですが、実は、大量生産、大量消費ということを考えていく過程では、表現上、どうしても商業的な要素が多いわけです。それに対して、絵本というのは、対象を子どもに見据えていく、その主体があったからこそ、明確に作り手と受け手の関係がきちんと結ばれていた。そのためには、奇跡的なメディアとして、あまり汚れることなく、あまりいびつになることなく、本質的な問題を常に追いかけながら、今日まで至ったという経緯があるのではないかということを言ってるわけです。そういう意味で、子どもという対象をきちんと押さえた上で、さらにそこから絵本全体を考えていくことも、とても大事なのではないかと考えられます。そのことについて少し、みなさんからのお話をいただきたいと思います。最初に松居さんいかがでしょうか。

松居：「子どもの発見」ということと関係があるのではないかと、私は思います。近代になって「子ども」というものが認められました。このことと絵本とは関係がありますし、日本の場合でもやはりそうではないかと。先ほど言いましたように、1914年に『子供之友』が作られたとき、はっきりと子どもを一つの人格として認めるという考え方で作られておりましたから、それは非常に新しい、それまでになかった一つの思想、考え方を打ち出していく、そういうところに将来の芽があるのではないかということをみんなが信じたのではないか、と私はとらえています。またもう一方では、子ども向けの本でなくてもかまいません。長倉さんの写真集は、絵本であって、写真集であって、誰が見てもいいというものです。私は、あまり枠組というものをつけなくてもいいと思うのです。ただし、私は子どものために作るということが好きなのです。子どもというのはものすごく面白いものですから、大人よりはるかに心に訴えかけるもの

があって、楽しいし、面白い。だから、私は一生懸命子どもの本を作っていくのではないか、と思います。

今井：ありがとうございます。では、駒形さんはいかがでしょうか。特に駒形さんの場合、自らのお子様のために作っていく過程、それからそれが作品化されていき、次の段階ではワークショップとして社会との関係が作られていく。このあたりも含めて少しお話しいただきたいのですが。

駒形：わたしは、子どもに対象を絞って作っているわけでは決してないんですが、たまたま私のスタンスというのが、自分の子どもの成長に合わせて作ってきた、そういう経緯で、必然的に対象が子どもとなっていったわけです。ただ、大きく考えていったときに、今、世の中にいろいろな歪みとか問題があって、決して世の中のシステムが100%完璧ではないと思うんです。いろいろな問題を抱えている。そういう問題が、子どもたちの世界に非常に現れやすい、つまり子どもやあるいは高齢の方といった弱者の人たちに、そういう問題がしわ寄せのように現れていくんじゃないかと思えてならないのです。ですから、最近のいじめの問題、私たちが小さい頃ももちろんいじめはあったんですが、なぜ自殺するまで追いやってしまうかというと、私たちの時代はもっとオープンだったと思うんです。ただ、最近の子どもたちの社会では、ともすると、小さい世界、悪く言ってしまうと陰湿にまでなってしまっている、そういう傾向が多分にあるんじゃないかなと思います。ですからそういう意味で、コミュニケーションをオープンにしていく、そのための絵本のメディアというのが非常に重要なものになっていくのではないかと、私は考えています。

今井：どうもありがとうございました。この質問をいただいた方、再度ご質問をなさりたいという場合には、是非お願いいたします。いかがでしょうか。



会場：私があえてこの質問をしたのは、私自身絵本は決して子どものためのものではなく、大人も積極的に絵本を楽しむべきだという考え方で絵本研究をしている者なんですが、今日この総会およびシンポジウムに参加されている方の構成を見ても、圧倒的に女性が多い。そして男性は、パネリストは期せずして中年の男性が5人そろっていらっしゃいますが、一般に中年の顔面の男性が絵本を研究していますなんて言うと、普通の方からはすごく奇異に見られるんですね。「一体お前は何をしているんだ」というふうに思われる、それが一般的な共通認識だと思うんです。子どものためのものだという非常に根強い認識を、ことさらに否定するためにこの絵本学会ができたのかなど、そういうふうに思いたいところがある。今日参加されているいわゆる「女子ども」というふうにひとくくりされる方々から、すいぶん大きな反発があるのではと思うんですね。絵本学会と銘打って発足したにも関わらず、パネリストは男性が占めていて、いわゆる母親の目というものが今の時点ではほとんど考えら

れない、そういう抗議がこれから殺到するのではないかと、そういう危惧をちょっと抱いているんです。そのためにあえてこの質問をしたんですが。

今井：実はこの学会を準備していく過程で、当然絵本とはいってどういうもののなのか、かなりいろいろな角度から検討しました。どちらかというと現状では、絵本はやや偏った見方、文学なら児童文学の世界、あるいはイラストレーションならイラストレーション単独の世界といったところに置かれているのではないかと。ところが実際には先ほどの基調講演にありましたように、絵本というのは総合的なメディアと考えができるわけです。ただ、ある対象との対話、要するに作り手と受け手の関係をどういうふうに結んでいくのかというその線が見えない限り、メディアというものは本当は意味がないのではないか。そういう意味で、絵本もある意味ではグラフィックメディアに近いと思いますが、グラフィックメディアというのはどうしても、最初は対象との関係を持ちつつも、そのうちだんだん形式や様式に陥って、受け手とかみ合わなくなってくる。絵本もそうなってしまってはまずいわけです。そのためには、やはり中身の問題を大事に考えていかなければならない、と思いますが、松本さん、いかがでしょうか。

松本：たとえば映画にアニメーションや恋愛ものやドキュメンタリーなどさまざまな可能性があるのと同じように、絵本というジャンルにも、さまざまな可能性があつていいのではないかと考えています。それが、どうしても子どもの本だという意識が強く出すぎてしまうために、かえって絵本が大きく発展できないいるんじゃないかなと。広く可能性を追求していくことによって、その刺激を受けるだけで、実は子どもの本自体が魅力的な価値のあるものになっていくのではないかと思っています。それから、作家と直接会って作品を見る機会があるんですが、私が魅力を感じる作家の方たちと話をすると、ほとんどの方がやはり、子どものために描いているという意識はない。自分がどれだけ面白いものを描こうかというところにこだわっている。ですから、大人、子どもということを超えて共有できる面白さというのはたくさんあるんじゃないかな。そういうものをむしろ掘り下げるほうが、これから絵本にとっては面白い展開ができるのではないかと、僕は考えます。

今井：ほかにこれに関して、どなたか質問はございませんか。

会場：学会が、オープンにいろいろな人のアイデアを繰り込むという形にしたら、いろいろな答えがでてくるんじゃないかなと思うんですが、そういう意味で、子どもの活動をどんなふうにとらえていくのか、お聞きしたいと思います。

今井：太田さん、いかがでしょう。

太田：僕は直接子どもの絵本を書いておりますが、描く前に対象年齢というものを一応考えるわけですね。赤ちゃんと中学生くらいの大きい子どもでは、やはり多少考え方や描き方が違うと思うんです。けれども最初にそれを考へた後で、子どもということは忘れてしまって、一生懸命絵を描くことに集中するわけです。それで、この会が、先ほどおっしゃったように楽しく気楽に参加できることが一番いいと思います。そのためには、運営委員会でいろいろシナリオや演出を考えながら、やわらかく動いていく、そういうことを、これからみんなで考えたら一番いいと思います。

今井：今のことに関連してもう少し、事務局をやっている立場ということでお話しさせていただきますと、学会を作っていく過程で当然いろいろ意見があったことは事実です。といいますのは、たとえ

ば太田先生は、「絵本フォーラム」というものの中で、できるだけ気楽に、気軽に参加しながら、先ほど言ったような問題についてさまざまな方たちと話し交流したい、とおっしゃっていました。しかし学会という形になると、そういうことはなかなか難しいんじゃないかと。

ただし、もう一方で、まだ絵本という領域自体が、日本では必ずしも明確に位置づいていないわけです。ましてや「絵本学」といわれるもの自体が現実にない。こういった状況を考えると、ある程度研究の場を持っている人たちにとってはそれほど問題ないかも知れませんが、これから若い人たちがいろいろな角度から研究していくたいと考えたときに、どういう場があるのか。そういう意味で、学会はやはり必要だろうと。確かに学会というのは非常に堅い響きを持っていて、どうしても研究者集団という見え方があるのですが、一方では、やはりそういう部分も残しておく必要があると思うのです。そういう部分もあって初めて、専門性の高い、高度な研究も行われるわけですし、またそこで研究されたものが、具体的に絵本制作の現場や絵本のさまざまな分野に還元されていけば、それは最も望ましいことだと思うのです。そういう意味で、社会的に多様な側面を見せていくことや、具体的に活動するためのいろいろな基盤が作れるのでは、ということがあって、あえて学会という形をとったわけです。

日本では専門分化の傾向が非常に強いわけです。ですからどうしても、児童文学は児童文学、グラフィックはグラフィック、何々は何々、とすべてが専門分化しているために、絵本自体が大きな歴史の枠組みの中で評価されるということが、なかなか難しいという側面があります。しかし、先ほど松本さんもおっしゃっていましたように、絵本は、美術史全体の流れの中に、もっと大きな意味を持つて関わっていいはずです。また絵本独自の表現史やイラストレーション史、あるいはさまざまな表現技術の問題、こういったものをきっちり押さえることで、むしろ他の領域とのつながりが明確にあるんだということを再確認し、その上で絵本というものをもう一度新たな分野としてきっちり位置づけていくことが大事なのではないか。そう考えると、確かに親睦的に交流をしていくことも重要だとは思うのですが、やはり今の日本の現状では、絵本学をある程度確立させていくためには、「学会」という部分がどうしても必要だと認識しているのです。ですから、太田先生が考へていらっしゃる「フォーラム」というものをその中に作っていくことで、接点を作っていく、それが一番いいのではないかと思っております。

では、少し違った角度からの質問を取り上げてみたいと思います。「絵本は平面の作品がほとんどだと思いますが、立体と絵本がつながる関係についてどんなふうに考えますか」という質問があります。実際、絵本は必ずしも平面のものだけではありません。美術資料図書館での「絵本とグラフィックデザイン」展をご覧になってわかると思いますが、立体的なものも多かったと思います。ただそれは、立体的といつても絵本が単に立体的な構築物になったというわけではありません。絵本は、確かに、視覚的な要素が強いということがよく言われますが、本であるということを考えれば、手でさわるという感覚があるわけです。また同時に、見るという行為すらも、実は単に眼によって見ているのではなく、眼がついている肉体があるわけです。そういう意味で、本当は身体全体で見ているという感じ

があると思います。絵本そのものが単なる平面、あるいは単なる書物の延長というものではなく、幅広く人間、身体との関りの中でとらえられていくメディアだと考えれば、立体だと平面だとかということを超えた表現が生まれて当たり前だと思うのです。少しそのことに関連して駒形さんにお聞きしたいのですが、駒形さんは自分のお子さんのためにカードを作り、それを作品にし、それをまたワークショップに展開されています。そのように、単にものを作るだけでなく、それを具体的にどう展開するか、というところでワークショップを選んでいらっしゃると思うのですが、デザインには、ともすると作りっぱなしというようなところがあります。そういうところで、確実に相手との関係を作り上げていく、ある意味では運動ですよね、そういう考え方を、駒形さんに少しお話しいただきたいのですが。

**駒形**：実は私は20代のほとんどをアメリカで生活していました、そのとき英語を全然話せずにアメリカに行ってしまったので、当初非常に言葉の障害を持ったわけです。日本を感じることは、いわゆる单一民族、しかも日本語という單一言語を使用していて、当然のことながらコミュニケーションについても、こういう話し方をすれば伝わるだろう、わかるだろうと、「だろう」という部分でコミュニケーションできてきていている部分が多分にあると思うんですね。ところがアメリカに行くと、全然人種が違う。たとえばもちろん健常者もいる、身障者もいる。言語を全く話せない人もいる。そういう人たちにどうコミュニケーションをとっていくかというのは、非常に難しかったわけです。それでそのとき私が一番感じたのは、やはりコミュニケーションというのは一方通行ではなくて、相手がどう感じているのか、あるいはそれをどう受けとめているのか、そういうことを日々の中でつかみながらコミュニケーションを達成していくのが、本来の姿だな、と思うわけです。

子どもたちとのやりとりの中で一番感じるのは、ともすると子どもを受け身扱いにして、我々大人の概念を強要しがちになってしまっているのではないかと。もう少しキャッチボールのように、こちらがボールを投げたら向こうからボールが投げ返されてくる、そのようなコミュニケーションを考えてみてはどうか。子どもたちは、受け手ではなく積極的に作り手になれる、ということを、私はワークショップや絵本などいろいろな形で提案してきているつもりです。実際ワークショップをやっていくと、子どもたちがとてもにこやかに反応してくれるんです。ですから私は、絵本の世界は、いわゆる情操教育としての美術教育にまで高められる可能性が大いにあるのではないか、と考えております。

**今井**：何か会場の方からご質問がありましたらどうぞ。

**会場**：私は、映像の製作会社で子どものためのソフトをCD-ROMやテレビを通して作っています。いつも思うのは、子どもに伝えるメッセージなど核になるものがあれば、そのときどきによって手法や文法を変えるというように、メディアにこだわらなくてもいいのではないかという思いと、逆に絵本なら絵本にしか伝えられないものがあるのではないかという、二つの葛藤があるのです。私自身、絵本にまつわる思い出はいっぱい持っているんですが、逆に子どもが絵本を自分の中で経験化していくとき、絵本のメディアとしての限界を感じるようなことがあれば、是非お聞かせいただきたいのですが。

**今井**：松居さん、いかがでしょうか。

**松居**：絵本はオールマイティーではないし、明らかに一つの限界が

あると思います。たとえば絵が動かないということ。ページをめくるという形では動くわけですが、明らかに静止画です。絵本というのは大人が子どもに読んでやるもの、というのが私の編集方針なんですが、大人が子どもに読んでやるとはどういうことかというと、大人がテキストを自分の声で読み、それを子どもが聞く。そしてそれとまったく同時に、イラストレーションを見られるわけです。自分で絵を通して読んだ言葉と、耳から聞いたテキストの言葉が、子どもの中で一つになったとき、子どものイメージの中で絵が動き出していく。絵本ではそういう体験ができるのです。そして、その時に本当に大切なのは、人間が一緒にいるということです。それが僕はとても好きなのです。お母さんでもお父さんでもいいんです。一緒にいること、それが一番大事なのだと思います。

今井：長倉さんいかがでしょうか。

長倉：スチール写真とアニメーションの場合についてお話ししたいんですが、動く映像の場合、どうしてもスピードがある程度制限されていて、捨い落としてしまうものがたくさんあると思います。ところがスチール写真の場合は、そこで止まっている。逆に言うと、じっくりその画面を見るということは、好きなだけそれを見ていて、なおかつその人の表情や、周りにはこんなものがあった、こんなものが落ちていてこんな道具を使っているんだとか、飽きるまで見て、いろいろなものを捨い取ることができるということ。それはつまり、子どもたちが今の世の中で、すべてが流れていく中で、逆に立ち止まって、その中から100%あるいは想像力を使って120%くらいのものを引き出すことができるということです。先ほど言っていた、子どもたちの自主性ということ、それが、静止画というものの中にも含まれているのではないかと思います。

今井：ありがとうございました。ほかに質問がある方、どうぞ。

会場：私は絵本のストーリーをいくつか書いた経験があります。今日はグラフィックメディアとしての絵本ということで、それは大変重要なことだと思いますが、それだけに収斂してしまうのは私としては非常に残念です。というのは、やはり絵本は、ストーリー作者と画家と編集者の共同作業で作られるものだと思います。画家がストーリーを作るのが一番望ましいのかもしれません、まず初めにストーリーがあるのが普通だと思います。絵本というメディアの制限の中で、画面数が限られている中でいかに効果的に物語を作るかということ。そちらの方の部分を、今日のパネラーの中にはストーリー作者がいらっしゃいませんが、もう一人そちらの方も加えてほしかったと思います。それと、なぜ女性がいないのかな、と今さら眺めて異常な状態だと思いました。

今井：他意はなかったんですが、たまたまそうなったというところです。

今件ですが、必ずしもここではグラフィックメディアにこだわっているわけではありません。それともう一つは、メディアあるいはデザインというものに対して、おそらく一般的に誤解もあると思うのです。どうしても、アート、メディア、デザインというふうになると、形式的な問題、技術の問題を優先して見られてしまうことがあります。ここでとらえているところのメディア、つまりデザインは、あくまでも中身の問題です。テキストも含め総合的に考えていくことが、デザインでありメディアである、という認識なのです。そういうことも、まだまだ全体の中に共通認識ができていない。やはりこういう場で共通の認識、共通言語を作っていくことも大事のだと思います。

松本：言葉の問題はやはり非常に重要だろうと思っています。というのは、日本の歴史の中でもたとえば俳画など、絵と言葉が響き合ってその背後にあるものがどれだけふくらむのかということがかなりたくさんあった。近代ヨーロッパ芸術の中でも、アニメーションをやっている人は、言葉と画面のギャップをどういうふうに感じさせるかということをやっていた。むしろ今まで問題にならなかつたのは、絵本のストーリーが先に完成していて、それにイラストレーションをつけるという方法があったからではないかと思います。絵本学会でやらなければならないことは、絵本にとって言葉はどういう役割を果たしているのか、どんな言葉だったら重厚なもう一つ奥の世界を広げられるのか、そのあたりのことがまさに、我々にとっての課題ではないか、と考えています。

今井：ありがとうございました。今までお話しいただいた中で、歴史ということが何人の方から出てきたと思います。特に、CD-ROMをはじめ新しいコンピュータ・メディアによるさまざまな表現が登場していくことで、絵本との関係がどうなっていくのかということが、重要な問題になると思います。しかし、歴史的に見ても、それまでに培われてきたメディアが簡単に消えてしまうということはないのです。CD-ROMやコンピュータ・メディアが出てくることで絵本が消えてしまうと考えるのは、非常に短絡的だし極端だと思います。むしろ、コンピュータ・メディアが登場することによって、改めて人間の原初的なものを感じる、あるいは全体でとらえていくということを、逆に意識するようになったと思います。絵本の世界は、もともとある種の“対話性”を持っていて、ある意味では身体を通して関わっていく世界を持っているわけですから、そのことがさらに意識されてくるわけです。コンピュータ・メディア、映像メディアが持っている独自の時間性がそこにあることが、もっと意識されてくる。そうすると、今度は作り手も変わってくると思うのです。それは、ちょうど1920～30年代に登場したアメリカの絵本が、映画や新しい実験的な視覚表現の影響を受けることで、まったく新しい時間と空間の表現を展開していくように、コンピュータ・メディアが登場することで、絵本はまた新たな表現の世界を作り上げていくのではないか、と思います。

そういう意味で、絵本に限界が来るのではなく、また新たな面白い展開がこれから始まるんだなというふうに、僕などは見ているわけです。そういう意味で、歴史をきちんと学んでいくことが非常に重要なのだということを切実に感じます。目の前にある新しい技術、新しい問題だけに飛びついでいったところで、果たして本当にそこから次の問題解決のための有効な手がかりが見つかるのかというと、はなはだ疑問なわけです。やはりこれまでに蓄積してきたものをもう一度改めて確認することで、今の位置が見えてくるのではないか、と思います。

それでは最後に、松居さんの方から、歴史の重要性というところで締めていただけますか。

松居：みなさんで、過去と現在という二つの流れを、そして、これからいいたい何ができるのかということを考えていく必要があると思います。それが、この学会の一つの手がかりになるのではないでしょうか。

今井：どうもありがとうございました。

それではこれで、シンポジウムを終了させていただきます。

\*これはシンポジウムを再掲したものですが、紙面の都合上一部割愛しております。

## 専門委員会の発足

6月7日、7月5日開催の理事会、運営委員会で、専門委員会の設置と活動内容が検討されました。

その結果、次の4つの委員会とそれぞれの委員長が決まりましたのでお知らせいたします。

それぞれの委員会は、今後委員を募り活動していくことになります。

●企画委員会 委員長－香曾我部秀幸

●研究委員会 委員長－増成隆士

●出版編集委員会 委員長－澤田精一

●広報委員会 絵本学会事務局におく

[企画委員会から]

企画委員会が発足します。全くの白紙状態からの出発ですが、絵本学会を「閉ざされた研究発表の場」ではなく、太田大八氏の提唱された「絵本の作り手と受け手に開かれたフォーラム」をはじめ、講演会、シンポジウムなどを通して情報交換と交流をはかっていくための使命が与えられた委員会だと考えています。既成の概念にとらわれない柔軟なアイディアをどしどしお寄せください。また共に汗を流していただける強力なスタッフを募集しています。自薦他薦問いませんのでよろしく。(香曾我部)

[研究委員会から]

(1) 絵本ライブラリ、アーカイブを絵本学会として持つことができれば、すばらしいが、恒常的な場所とスタッフを用意することはとても無理なので、諸機関の絵本ライブラリ、アーカイブの蔵書データなどにサイバー・リンクを張ったリンク集をつくること。効率のいい検索エンジンもつくれれば、より有効。さしあたっては、その基本構造について検討したい。

(2)これまで絵本研究をおこなってきた分野に加えて、これまでにおこなってこなかった分野での絵本研究をプロモートする研究会、フォーラムを考えたい。

(3)なにかひとつテーマあるいはモチーフを設定して、それによる絵本を国内および海外の絵本作家に制作してもらい、これを一堂に集める。そして、これを契機にした会員交流のイベントや研究会などを考えたい。(増成)

[出版・編集委員会から]

出版・編集委員会は、学会機関誌の発行を目的とします。機関誌は、1年間に1回の発行で、絵本についての論文、研究報告の発表の場となります。来年早々には、どのように論文、研究報告を書いていただけるか、その応募規定をお知らせできればと考えています。なお、機関誌の体裁もまだ決まっていませんが、これもまたあわせてお知らせできればと、現在作業を進めているところです。できたばかりの学会ですので、あまり出版の資金は豊かではありませんが、絵本学会らしい読みやすく、親しみのもてる機関誌にしたいと思っています。(澤田)

[広報委員会から]

広報委員会の仕事は、主として対社会的広報の活動と、年2回の発行を予定しているこの絵本学会ニュースの編集、制作、それとインターネット・ホームページの管理運営です。

可能なかぎり、会員間の交流が自然にはかれるメディアにしたいと考えております。よいアイデアがあれば是非お寄せください。

また、このような仕事に興味のある方は、お手伝いいただければと思います。ご一報ください。(今井)

## information

### ○絵本関係展覧会・イベント

#### ●子どもの城

7/19（土）～8/31（日）

《遊び・絵本・知育 コマガタワールド》

グラフィックデザイナー駒形克己氏の絵本展示とワークショップ。

・ワークショップ

「お絵かきカードで遊ぼう！」

8/22（金）10:00～12:00

対象：4歳児（4/1現在）～小学校1年生 50名

紙に開けられた穴をきっかけに、想像力をひろげていきます。

「ひろがるカードをつくろう！」

8/22（金）13:00～16:00

対象：小学校2年生～中学3年生 50名

折り紙のようにたたんだカードを広げて見ると、描かれた絵が大きく変化します。

「親と子で楽しむ家族の絵本をつくろう！」

① 8/23（土）9:00～12:00

② 8/23（土）13:00～16:00

対象：5歳児（4/1現在）～小学校6年生と保護者 各回30組  
家族の写真を使って、世界に1冊しかないオリジナル絵本を作ります。

「想像力を育む絵本のワークショップ」

8/24（日）13:00～16:00

対象：児童厚生員・保母・児童健全育成関係者またはそれを目指す学生など

子どもの感性をはぐくむための絵本作りのワークショップの数々を実際に体験します。

参加申込 03-3797-5665 子どもの城 企画研修部

問い合わせ 03-3797-5666 子どもの城（代表）

受講料 3,500円（教材費・子どもの城入館料を含む）

【開館】10:00～17:30（入館は17:00まで）

【休館日】7/22・8/4・8/18

【入館料】大人500円・3歳以上18歳未満400円

〒150 東京都渋谷区神宮前5-53-1

☎ 03-3797-5666

#### ●世田谷文学館

6/28（土）～8/10（日）

《五味太郎の世界》

—GOMI TARO'S PICTURE BOOK WORLD—

五味太郎の絵本原画展示のほか、「五味太郎の発想工房（アトリエ）」「絵を描く楽しさへの誘い、落書き絵本コーナー」、ビデオコーナー、作者の図書閲覧コーナーあり。

8/23（土）～10/5（日）

《安野光雅と60人の作家の出会い展》

【開館】10:00～18:00（入館は17:30まで）

【入館料】一般300円・大高生200円・小中生100円

〒157 東京都世田谷区南烏山1-10-10

☎ 03-5374-9111

### ●竹久夢二美術館

7/3 (木) ~ 9/28 (日)

《竹久夢二 雑誌の愉しみ展—身近な芸術にみる大正ロマン—》  
夢二が手掛けた館所蔵の雑誌 200 点と関連の原画類を中心に、多彩な仕事の数々を紹介。

[開館] 10:00 ~ 17:00 (入館は 16:30 まで)

[休館日] 月曜日 (祝日の場合は翌日)

[入館料] 一般 700 円・大高生 600 円・小中生 400 円 (隣接の弥生美術館と共に通)、立原道造記念館も鑑賞できる三館共通券 (1000 円) もあり

〒 113 東京都文京区弥生 2-4-2

☎ 03-5689-0462

### ●弥生美術館

7/3 (木) ~ 9/28 (日)

《高橋真琴展—永遠の少女たち—》

1950 年代から現在まで少女雑誌や絵本・文具等に少女画を描き続けるイラストレーター、高橋真琴の全貌を紹介する初めての展覧会。

[開館・入館料] 竹久夢二美術館と共に通

〒 113 東京都文京区弥生 2-4-3

☎ 03-3812-0012

### ●県立神奈川近代文学館

《夏休み子ども映画会》

7/23 (水) 「少年アシベ」「モチモチの木」

7/24 (木) 「忍たま乱太郎」「猫の事務所」

7/25 (金) 「がんばれスイミー」「あんじゅとすしおう」

会場: 神奈川近代文学館ホール (展示館 2 階)

上映: 13:00 ~ (開場 12:30)

入場料: 無料 (当日先着 220 名)

〒 231 横浜市中区山手町 110

☎ 045-622-6666

### ●丸木美術館

11/6 (木) ~ 12/7 (日)

《丸木俊・吉村鷹村・小山光夫展》挿画／書／短歌

〒 355 埼玉県東松山市下唐子 1401

☎ 0493-22-3266

### ●軽井沢絵本の森美術館

7/3 (木) ~ 10/5 (日)

《クリスマス絵本—絵本に描かれた聖書の世界—》

フェリクス・ホフマン、ブライアン・ワイルドスミス、トニー・デ・パオラ等のクリスマス絵本の原画展。

《学芸員によるギャラリートーク》

7/26 (土) 「歐米絵本のあゆみ」

歴史のポイントとなる作家・作品をピックアップしつつ紹介。

8/23 (土) 「クリスマス絵本展」

上記企画展の概要を、特に原画と画家に焦点を当てて紹介。

9/13 (土) 「親子で楽しむむかしの絵本・いまの絵本」

歐米絵本のあゆみを、実際に絵本を見ながら子どもにもわかりやすく紹介。

\* 参加申込受付は各回の 2 週間前から下記まで (定員 30 名)

会場: 第 1 展示館内ビデオルーム

時間: 14:00 から約 1 時間半

参加費: 入館料のみ

[開館] 9:30 ~ 17:00 (入館は 16:40 まで)

[休館日] 会期中無休

[入館料] 大人 800 円・中高生 500 円・小学生 400 円

〒 389-01 長野県北佐久郡軽井沢町塩沢 82-1

☎ 0267-48-3340

### ●ペイン美術館

7/19 (土) ~ 9/26 (金)

《常設展》

館所蔵原画作品・リトグラフ・使用された画材ほか、関連資料約 62 点。

[開館] 9:00 ~ 17:00

[休館日] 会期中無休

[入館料] 大人 1,100 円・小中学生 800 円 (8/1 より大人 900 円・小中学生 500 円)

〒 389-01 長野県北佐久郡軽井沢町塩沢 217 軽井沢タリアセ

ン内

☎ 0267-46-6161

### ●黒姫童話館

6/1 (日) ~ 9/29 (月)

《斎藤隆介の世界展》

『モチモチの木』『ハ郎』などの作者斎藤隆介と画家滝平二郎のコンビによる絵本の世界を紹介。

10/3 (金) ~ 11/30 (日)

《絵本ポスター博覧会—絵本ポスターの世界で遊ぼう—》

フランス、イギリス、ドイツ、スロバキア、スウェーデン、韓国など世界 20 力国の絵本ポスター展示。

[開館] 9:00 ~ 17:00

[休館日] 3 月・5 月・6 月・9 月・10 月・11 月の末日 (日祝祭日の場合翌日)

[入館料] 一般 600 円・3 歳以上～中学生 400 円

〒 389-13 長野県上水内郡信濃町黒姫高原 3807-30

☎ 026-255-2250

### ●大島町絵本館

6/1 (日) ~ 7/30 (水)

《梅田俊作・佳子絵本原画展》

8/1 (金) ~ 9/28 (日)

《「とべないホタル」の原画展》

[開館] 10:00 ~ 18:00

[休館日] 月曜 (祝日の場合は翌日)・月末日

〒 939-02 富山県射水郡大島町鳥取 50

☎ 0766-52-6780

### ●竹久夢二伊香保記念館

・本館

8/10 (日) ~ 10/20 (月)

《夢ニの挿絵原画展》

11/1 (土) ~ 1/20 (火)

《夢ニ子供の世界展》

2/1 (日) ~ 4/20 (月)

《初期の水彩画と遺品展》

・新館

6/1 (日) ~ 11/20 (木)

《夢ニのデザインにみられるモダン (I)》

12/1 (月) ~ 4/20 (月)

《夢ニのデザインにみられるモダン (II)》

〒 377-01 群馬県北群馬郡伊香保町 544-119

☎ 0279-72-2661

### ●ちひろ美術館

開館 20 周年記念展

《画集『ちひろ美術館』出版記念展》

「花」「少女」「子どもたち」「旅」など、ちひろと切り離せないテーマを四季を追ってとりあげる。

7/17 (木) ~ 10/5 (日) 「子どもたちの季節」

10/9 (木) ~ 1/15 (木) 「旅ものがたり」

《インターナショナルコレクション展》

世界最大級の絵本原画コレクションの中から国際的に有名な作家を紹介。

7/17 (木) ~ 10/5 (日) クヴィエタ・パツォウスカー

10/9 (木) ~ 1/15 (木) 瀬川康男

《夏休み鑑賞教室》

ちひろとパツォウスカーの展示作品観賞後、いっしょに描いて遊ぶ。

①ちひろ…水彩画の色の秘密

②パツォウスカー…形の発見

日時：7/29 (火)、8/5 (火) 10:30 ~

対象：小学 1 ~ 4 年生

参加費：300 円 (材料費)

定員：20 名 (定員になり次第〆切)

申込み・問合せ ☎ 03-3995-0612 ちひろ美術館 芦澤・窪田まで

【開館】10:00 ~ 17:00 (金曜日は 19:00 まで)

【休館日】月曜日 (9/15 は開館、翌日休館、展示替えのため 10/6 ~ 10/8 は臨時休館)

【入館料】大人 500 円・中高生 200 円・小学生 100 円

〒 177 東京都練馬区下石神井 4-7-2

☎ 03-3995-0820

### ●安曇野ちひろ美術館

7/3 (木) ~ 9/16 (火)

《開館記念展・夏 輝く子ども》

・展示室 1 いわさきちひろ：代表作、初期デッサンや童画、絵本、信州の 4 コーナーでちひろの全体像を紹介。

・展示室 2 世界の絵本画家：18 力国 107 人 4500 点の収蔵作品から、常時 50 人 100 点の作品を国ごとに展示。今回はアニータ・ローベル (アメリカ)、ミルコ・ハナーク (チェコ)、赤羽末吉『スホのしろいうま』、ロングセラー『いないいないばあ』など。

・展示室 3 絵本の歴史：貴重本や資料、原画を通して絵本の歴史を

紹介。『世界図絵』の原版に近い 1833 年版、B.C.16 世紀エジプト『死者の書』の 1890 年復刻版なども。

・ギャラリー：ヴィルコンやラチョフの動物のオブジェ展示のほか、パツォウスカーが和紙と竹を使って日本で制作した直径 2m 近いオブジェを展示。

【開館】9:00 ~ 17:00 (8 月は 18:00 まで)

【休館日】水曜日 (祝日の場合翌日、8 月は無休)

【入館料】大人 800 円・中高生 500 円・小学生 300 円

〒 399-85 長野県北安曇郡松川村西原

☎ 0261-62-0777

### ●ブライアン・ワイルドスミス美術館

6/5 (木) ~ 9/2 (火)

《ワイルドスミスの ABC》

絵本『ワイルドスミスの ABC』の原画約 30 点を展示。

《ワイルドスミスの 5 つの不思議—What's Next?—》

科学者や音楽家としての多彩な経験と独特的ユーモアが潜むワイルドスミスの作品に、頻繁に登場するモチーフや手法 5 つを紹介。

9/4 (木) ~ 11/17 (月)

《石坂浩二のマザーグース》

絵本『マザーグース』の原画約 30 点を、館長・石坂浩二の訳を添えて展示。

《ワイルドスミスの自然の世界》

「子ども達自らが自然界の美を発見してほしい」と願い描かれた動物たちの絵本の原画展示。

【開館】10:00 ~ 17:00 (入館 16:30 まで)

【休館日】水曜日 (8 月・祝日は無休)

【入館料】一般 700 円・小学生 500 円

〒 413-02 静岡県伊東市大室高原 9-101

☎ 0557-51-7330

### ●氷上町立植野記念美術館 7/19 (土) ~ 8/31 (日)

### ●福井県鯖江 cci 美術館 10/18 (土) ~ 11/24 (月)

《絵本原画展—ゆめのともだち・こどものとも—》

創作絵本月刊誌『こどものとも』掲載作品のうち 11 作家の代表作をとり上げ、物語 (詞) とともに作品の全場面を紹介。

・氷上町立植野記念美術館

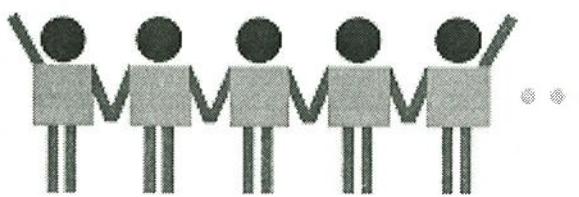
〒 669-36 兵庫県氷上郡氷上町西中 615-4

☎ 0795-82-5945

・福井県鯖江 cci 美術館

〒 916 福井県鯖江市本町 3-2-12

☎ 0778-51-2800



KATSUMI KOMAGATA

●公募

- 大島町絵本館 第4回全国手づくり絵本コンクール  
主催：大島町・(財)大島町絵本文化振興財団  
募集内容：未発表の手作り絵本（過去2年以内のものでテーマは自由）  
募集部門：①園児の部 ②小学生の部 ③中・高生の部 ④一般の部 ⑤合作の部（親、祖父母、友達…など）  
応募規定：1人1作品（ただし、部門を越える場合はその限りではない）  
サイズA3判以内、本文10ページ以上、製本方法は自由。ただし、表紙をつけ本の体裁をそなえ、多数の人々の鑑賞に耐える製本であること。画材、技法は自由。CG作品の場合は奥付（最終ページ）に機種名およびソフト名を記入すること。  
応募資格：不問  
募集期間：1997年9月2日（火）～9月25日（木）当日必着  
応募方法：所定の応募票に必要事項を記入し、絵本館宛に郵送または直接持参にて搬入  
※応募票は返信用封筒同封の上、絵本館に請求のこと。  
作品送付先：〒939-02 富山県射水郡大島町鳥取 50  
大島町絵本館「手づくり絵本コンクール係」  
賞：最優秀賞・優秀賞・優良賞・絵本の町大賞・絵本の町賞・絵本の館賞各1点、奨励賞数点、その他応募者全員に参加賞あり。  
審査方法：作品展示期間の入館者1人1票による投票、および審査委員会の審査による。  
〈審査員〉かすや昌宏（絵本作家）、小沢昭巳（童話作家）、林清納（画家）、森久子（富山女子短期大学助教授）、高井進（大島町絵本館長）  
応募作品の展示・入館者の投票期間：1997年10月10日（金）～10月30日（木）  
大島町絵本館パフォーマンスホールにて  
結果通知：1997年11月末までに個人宛に通知  
入賞作品の展示：1997年12月2日（火）～12月27日（土）  
大島町絵本館カフェギャラリーにて  
問い合わせ先：大島町絵本館  
〒939-02 富山県射水郡大島町鳥取 50  
☎ 0766-52-6780 ☎ 0766-52-6777

## 事務局からのお知らせ

### ●設立大会を終えて

5月11日、絵本学会が正式に発足いたしました。大会当日は、天候にも恵まれ、総会への出席者が159名、記念講演・シンポジウム参加者が約300名でした。講義室には予備のイスを用意しなければならないほどの盛況で、大会を準備して来たものとして、ひとまずほっとしております。

絵本学会が正式に発足して、これから学会としての真価が問われることになるわけですが、シンポジウムを終えて、会員それぞれの絵本へのかかわり方が多様であるだけに、学会としてまとまっていくことの難しさも痛感しております。

ただ、設立の趣旨そのものが、絵本の多様性を総合的な視点からと  
らえ、さまざまな分野の研究者、関係者と協力して「絵本学」の確  
立を目指そうというわけですから、よって立つ基盤の違いも考慮に  
入れながら活動していくなければならないと思います。

いずれにしても会員相互の活発な交流と日々の活動によって支えられていくわけですし、今後は、分科会の様な形での活動も重要なになっていくでしょう。

分科会の提案なども含め、活動に対する考え方を是非お寄せください。

### ● 理事会・運営委員会

6月7日 理事会および運営委員会 於：日本女子大学吉田研究室  
議題

- ・設立大会報告 出席者、収支決算、アンケート結果、登録会員数
  - ・今後の活動について
  - ・機関誌の形態と発行時期について  
機関誌は、今後出版編集委員会が中心になって検討、第1号の発行時期は1998年秋をめどに進めることになった。
  - ・専門委員会について  
4つの専門委員会とそれぞれの委員長候補を確認
  - ・運営委員の追加について  
運営委員選出規則（暫定規則）第1号に基づいて、澤田精一氏、香曾我部秀幸氏を理事の推薦を得て会長が任命
  - ・その他

7月5日 運営委員会 於：日本女子大学吉田研究室  
議題

- ・ニュースレターの記事内容について
  - ・会員名簿の発行について
  - ・今後の活動と進め方について

委員会の今後の進め方、機関誌発行の時期と形態、発行方法、講演会、フォーラム、イベントなどの開催、西地区の活動拠点などについて検討

  - ・理事会および運営委員会開催日程について
  - ・その他

### ●会員名簿の発行について

会員名簿の発行を予定しています。掲載内容は、会員カードに基づいて、1. 氏名 2. 現住所 3. 電話・FAX 4. 勤務先または在学年 5. 専門分野の順に掲載しますが、2.3. を勤務先などの連絡先を希望される方、電話など一部削除を希望される方は事務局にご連絡ください。

